
IS fusion

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S f u s i o n

【Nコード】

N 6 6 7 9 Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

タイトル通り、本編とオリジナルの融合。オリ主 久遠祐希が加わったISの世界．．．彼女もまたある意味の天才だった。IS学園に入学し波乱万丈の物語が始まる！その後、新たに転入生が．．．これは作者にもわかりません（笑）

なおこの作品は他作品を引用します。その都度助言しますがご理解を。

設定・注意（前書き）

テスト前だが気にしない。

というよりは気にもしない。

テストは金曜日

設定・注意

こんばんわ。今から投稿していくのはIS<インフィニット・ストラトス>を元にしたオリ主を加えた小説です。小説自体初めて書くので多目に見てくださいれば有り難いです。なお、文中のキャラや機体、世界設定について自分が愛読しているお気に入り小説を参考・もとい引用させていただきます。その際は前書き、後書きで備考として入れていきます。

そんなこんなで始めたいと思いますのでよろしくお願いします。

あ、あと自分は高1ですのでテスト等で不安定となります・・・それでも読んでくだされば光栄です。

目標は、

「自分のお気に入り小説の融合」です。

それでは次回からよろしくお願いします。

一話 興味の対象（前書き）

勉強するやる気がない

テストはできないひとがすねばいいといつも思う

一話 興味の対象

私は今歩いている。
何処へって？

友人の家にです。私の最初の友達、篠ノ之箒と遊ぶ約束をして今向かっている。

私は毎回おもうのだけど、箒の姉さん、東さんはいつも無表情・冷酷：
徹：

今となつてはあまり気にしなくなつたけど、それがただ単に興味の対象じゃないからだそうだ。

それはさておき到着！呼び鈴ならして少し待つ。そして、

「祐希早かったな、あがつていいよっ！」
箒ちゃん登場！！

「うん！ありがとっ！お邪魔します。」

私は久遠祐希^{ひさのちゆう}8歳。小2。

まあ、自己紹介はおいといて、靴を脱いで上がる。

2階に向かっていると色々とプリントを持った東さん登場。

多分今日も同じなんだろうなあと思いつつ、

「こんにちはっ」
と挨拶すれば

「……………こんにちは。」

やっぱりそつかあ。変わらないや。

東さんの腕から一枚抜けて落ちた。

祐希はそれを拾い渡そうとしたが…

その内容を見て全てが分かってしまった。

そして、

「この図は何かのグラフ…？ネットワークのような…。でも所どころによって途切れている…。自己進化の過程？」

周りからみればただのグラフ…その証拠に箒は頭の上に？を浮かべている。

だが、そのつぶやきに東は見逃さなかった。

「…！？…君、分かるの？」

「えっ、…まあ、なんとなく？なんかひらめいたから、つい」

東さんの気迫に押された！

祐希に軽いダメージ？

「じゃあじゃあ、これはどうかなっ？」

東さんの気迫上昇中？

「これは、言語認識プログラムが神経接続？その先は…脳？さっきのネットワークのようなものの通信かな？」

「凄いよ君、君も天才だあ？ 君の名前はっ！」

東さんは以前の無関心な対応が一変した。
当然その対応ができる訳なく、

「ゆ、祐希。久遠祐希です…。」

少し噛んでしまった。

「祐希ちゃんかあ…うん！ゆうちゃんに決定！いつでも来ていいよ。」

愛称が決まった！興味の対象となった瞬間だった。

「姉さん、…祐希いつも遊びに来てるけど。」

「えっ、そーなの。まあ、いつか」

「はあーっ…」

落胆する筈と祐希だった。

まだこの時2人はこのさきの未来が予想できなかった。

一話 興味の対象（後書き）

今回は和利夫さんのを引用しました。

オリ主と東さんを結ぶのはこれしかないと思いました。

ここから数話は和利夫さんのを引用していききたいと思います。

二話 助手依頼（前書き）

テスト前なのに執筆する．．．
勉強嫌いじゃないけど、飽きた。

二話 助手依頼

東さんとの出会い？から数年。私は普通に過ごしていた。もちろん、第ちゃんの家にも遊びに行ったりもしていた。その度東さんも出迎えてくれた。

そしてその時が来てしまった。

宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツ・・・

『インフィニット・ストラトス』・・・通称『IS』だ。

最初は注目されなかったけど、（東さんは学生だったため注目された）その後起きてしまった

『白騎士事件』で一躍注目されるようになった・・・兵器として。

しかもISは「女性にしか扱えない」から各国で女尊男卑が進んでしまった。

あれから数ヶ月、私はいつもどおり暮らしていたけれど・・・

「祐希いー。電話よー。」

一階から母さんの呼ぶ声がした。私は読みかけの本を置いて部屋から出た。

「誰から?」

「それがねえ、分からないのよ。ただ、『祐希ちゃんいますか』ってしか。」

誰だろう?と思った。私に電話をかけてくるのは篝ちゃんか一夏くんしかかけてこないから。
そう思いながら母さんから受話器を受け取った。

「もしもし?」

「...もしもし、ひねもす?」

...ああ、あの人しかいないと思った。電話をかけたらいつものセリフ、これは...

「東さん?」

「はあくい。みんなのアイドルっ、篠ノ之東さんだよー!!」

このタイミングでっ!? まあいつか。取り敢えず...

「何か要件があるんですか?」

「うんうん、ありあり、超アリなんだよーっ!! 取り敢えず家の前にいるから出てきて出てきてっ!!」

「はあーい。じゃ、今すぐ...」

「それとっ。今日は泊り込みで来てくれるかなあ？いいかなあ？」
ダメだ、これは「必ず泊まってね！」って言っているようにしか聞
こえない。

「はあ、分かりました。少し待っていてください。準備しますから。」

「うんうん、束さんは律儀な子は好きだよ？」

なぜ疑問形？と思いつつ受話器を置いた。

「母さん、友達の家泊まりに行ってもいい？」

泊まるなら申し出をする。これ小学生の鉄則。

「いいわよ。迷惑かけないようにね。」

すごいあっさりだ。こんなところがいいのかもしれない。

「分かった。行ってきます。」

私は準備をして、家をでた。すると目の前に束さん。

「きたきた、じゃあ行こっか！」

言われるまま私はついて行った。

数十分後、ある建物の前に到着。ここは・・・？

「ここはねー、私がISを開発した場所、『倉持技研』だよっ！」

ここがISを開発した場所かぁ・・・って私が来る場所じゃないよね。

「私がゆーちゃんを呼んだのは、私の助手になって欲しいからなのだっ！」

うん、よく聞こえなかった。

「・・・え？」

「だから、私の助手になってほしいのだっ！」

うわー、いきなりだよ、いきなり。

「なんで私なの？」

「頭がいいからだよ？」

疑問形返しは止めましょう。

「だってゆーちゃん、全国模試いそグフツ！」

「言わなくてもいいでしょっ!?!?こんなところぞっ!?!?」

「(・・・!コクコク)ぷはっ。ゆーちゃんひどいつ。ちーちゃん顔負けのアイアンクロー・・・!どこで習ったの?」

「千冬さん本人。」

こんなこともあるのかと私は習っておいたっ！これから先も使おう、うん。

「取り敢えず入ろう、そうしよう！」

「はい．．．」

何か上手く乗せられたような気がするけど行こう。聞くことも沢山あるし、なぜ私なのかも聞こう。そう考えながら足を進めた。

二話 助手依頼（後書き）

今回は特に引用しなかったと思う。

次回はシートさんの作品で出てくるあの人が登場するかもしれない。
倉持技研[®]でわかると思います。

三話 AI（前書き）

テスト一日目が終了。

気休めに投稿。

オリ機体のデータ収集中なので感想などで意見を入れてくれると助かる。

今回はシートさんから一人登場します。

倉持技研〃この人です。

ではどうぞ。

三話 AI

取り敢えず倉持技研の中にある応接室に入って休憩中。私は束さんの真理を知るために聞いてみた。

「で、もう一度聞きたいのだけど、何故私なの？」

「もう、だから「頭がいいから」って言ったでしょ？全国模試一位のゆーちゃん？」

うわぁ、案の上の返答。

ちなみに一位は一位でも二位と50点差以上の差を付けての一位。これについて私の学校は順位を配らないなどの対策をしていたらしい。これは文部科学省の目にもつき、後日IQ検査をした。

結果、IQ180。小学生の頭脳じゃないっ．．．と私自身思った。とゆーか、なぜ束さんは．．．

「知ってるのかでしょ？私に知らないことはないのだよ．．．!」

この人は相手の考えることが分かるのだろうか。私も欲しいなあ、うん。

「まあー、それはおいといて。この束さんが作ったISは女性しか使えないのは分かるよね。いずれゆーちゃんも乗ってもらってから助手になってほしいとおもったからさあ。」

乗るのは確定ですか．．．。でも、乗りたいとは思ってたけどね。

「それでねー、あといつくんを守って欲しいんだよねー。そのためにゆーちゃんに専用機を作るの。それでゆーちゃんも手伝ってもらんだ。特にAIやOS中心にねー。」

ん？なぜ一夏くん？

「それはっ、ゆーちゃんが仲がいいからだよっ」

二度目だ。心を読まないで欲しいなあ。でも専用機を作れるのは嬉しいなあ、と思っただけだ。

「それでゆーちゃんは協力してくれるかな？」

うーん、どうしようかなあ。

「はい、お茶を持ってきたわよ。ん？あなたは東ちゃんのお友達？」

ドアが開きお盆をもった白衣の女性が来た。その顔立ちはとても若く、一言言っただけで『美人』。

「奈々さんありがとー。この子は私の親友だよっ！」

「久遠祐希です。おじゃましています。」

「あらあら、可愛い子ね。この子が祐希ちゃんね。私は水城奈々よ。奈々さんでいいわ。よろしくね。」

ここから、少し備考モード。

水城奈々 倉持技研最高責任者。倉持技研は奈々さんの夫が支援

している。(夫についてはシートさんの作品にて。今後出てくる可能性有り。)

年齢は40代と言っていたが、どう見ても20代にしか見えない美貌である。

ちなみに料理の腕は確かである。

以上

「祐希ちゃん、そんなに焦らなくていいからゆっくり考えていいわよ。私も最初は驚いたのだから。」

言われたとおりだ。ゆっくり考えることにしよう。私は貰ったティークップを傾けながら頷いた。

それからそれから、あれこれと30分ほど色んなお話をした。

「さてとっ、ゆうちゃん、奈々さん、研究室に行こっか？ゆうちゃんはまだ答えられなくてもISみたいでしょっ！」

正直私はISを見たかった。さっきの話は拒否してもまだから……

「見せてくれるなら見たいですっ！」

「よろしい。素直な子は束さんは大好きです！」

「あらあら、お姉さんぶっちゃって。可愛いわねっ」

奈々さんは微笑みながら言っていた。

「むう、奈々さん痛いところを．．．。」

さすがの東さんもお手上げみたい。

早速私たちは研究室に向かった。白い壁、白い床の廊下を歩いて到着っ！20秒。意外と広い。東さんはコンソールの前に立ち常人にはありえない速さで何か打っている。パスワードかな？と思っていると終わったらしい。

『パシユッ！！』

ドアが開き私たちは中に入って薄暗い中を中央にある「物体」に向かって歩いた。着いたとたん部屋の明かりが付いた。

灰色の機体が鎮座している。そのシルエットはまだ研究中！という雰囲気。私は思わず、

「ISS．．．。」

とつぶやいた。東さん、奈々さんは私を見て微笑んでいる。どうも私の顔に興味津々．．．

「って、近いんですけどっ！」

「あっ、ごめんごめん。つい見とれちゃって。(てしまって)」

仲いいなあと思いつつ、聞いてみることにした。何を？決まっっている。

「触っていい？」

二人は顔を見合わせ、「うん。」と少し考えていた。そして、束さんが

「これはちよつとね。ISはね国家機密でもあるから普通の人が勝手に触っちゃいけないんだあ。でもねでもねつ、この倉持技研の研究员、つまり私のお手伝いの件をOKしてくれたらだいじょうぶなんだよっ！」

やっぱりそうきた。でも私はこれを見た瞬間決めていた。

「うん、私は束さんのお手伝いをするっ！．．．でもお母さんとお父さんにも言わないと．．．。」

「そうよねえ。流石に小学生が決めてもいけないからね。じゃあ、一応仮契約の段階で進めましょうか。政府も祐希ちゃんのこと承諾してくれるだろうしね。両親には明日説明しましょうか。それでいい？祐希ちゃん。」

それは妥当だなあ。政府が承諾してくれても契約していなければ条約違反になっちゃうだろうし。

「分かりました。お願いします。」

「じゃあじゃあ、触っていいよっ！」

私は恐る恐る近づき．．．触る。

その瞬間あらゆる情報が流れってくる。

「コア・ネットワーク・・・接続未設定。ハイパーセンサー・・・構築中。P I C < パッシブ・イナーシャル・キャンセラー > ... 構築中。シールドバリアー、及び絶対防御・・・構築中。ワンオフ・アビリティ < 単一使用能力 > ... 構築中。初期設定プリセット・・・未設定。拡張領域無しパススロットの為、後付装備アイコンイザ・・・未設定。e t c ...

・・・コア・ネットワークA I システム、「久遠祐希」による設定の為、未設定。e t c ...」

・・・何故A I システムは私が設定する事になっているのかなあ？
前々から考えていたのかなあ？

「ちなみにね、ゆうちゃん。この子のA I システムについてはゆうちゃんに設定してもらおうとI S を『開発したとき』からかんがえていたんだよっ！」

やっぱり・・・。

「なんでそんなときから？」

「面白そうだからさっ！」

きました根拠なし攻撃。私は落胆というダメージを・・・

「でもねでもねっ、全国模試はI S が発表される前でしょ？採点が終わった瞬間、私の全情報収集能力を行使してゆうちゃんのデータを得たんだ。そのとき私が決めただよっ。」

受け流した。とゆうか東さんには尊敬しかない。どんな情報収集を

したんだろう？

「それでそれで、AIの開発してくれるかなあ？」

私は少し考えたが、言うまでもない。答えはこれしかない。

「．．．やります！私はISをもっと知りたい！」

「じゃあ、私とISの基礎から学びましょうか。わからなかったらなんでも聞いてね」

「はい、わかりました。」

「東さんは新しいISを作ろつと」

その日はIS漬けになったことは言うまでもない。

三話 AI（後書き）

シートさんの「verweiledoch, du bist
so schön」より水城奈々さんを引用しました。性格が
いまいち再現しにくかった。駄作で申し訳ないです、シートさん。

本編にはあと2〜5話（大まかですみません）かかると思います。

前書きでも書きましたが、感想をお願い致します。

四話 最年少の研究者（前書き）

テストなんて知るものか。

適度にやればそれで良い。

それではどうぞ。

四話 最年少の研究者

倉持技研で泊まった次の日、私は一旦報告のために家に帰ることを決めた。東さんの助手、もとい倉持技研に所属することになるため、奈々さんが同行してくれることになった。

一方、残って開発するといった東さんは

「ほいほいっと。そして次は . . . 。」

現在絶賛作業中。天才と言われるだけの技術力もある。空中投影パネルを3つ浮かべ並列作業をまるでマシンガンのようにこなしている。

「それにしても、ゆうちゃんは行動力があっていいね。それと昨日の学習力には驚くなあ。」

昨日は奈々さんとゆうちゃんですISの勉強をしていたのだ。私は新しいISの開発をしていたのだけど . . .

驚愕の2文字以外ありえなかった。ゆうちゃんは奈々さんが教えたこと全てをその場で理解していた。なんとという学習能力、いや完璧な理解力だね、うん。

「そーいや、私がゆうちゃんを誘った理由はなんだったっけ？うん . . . あれだっ！」

時は全国模試終了後。当然その頃の私はゆーちゃんと親しかった。あの時に拾ったプリントを見てあそこまで理解するなら学力も高いはず！．．．そう思っただけであらゆる手段^{ハッキングも}を行使して情報をGET!! 点数が異常だったがそれは気にしない。予想の範囲内だね。IQも．．．予想通り。私並みだね。

しかし、このあと問題用紙の裏に書いてあった情報を見て驚いた。普通は問題用紙の裏なんてだれも記録しないのだが政府は学力に驚いて残してあったのだらう。（問題の解答途中を見るためだらう）

私と会った時のプリントの内容がそのままそっくり書いてあった。しかも改善法まで。その改善法は私の改善法とほぼ一緒だった。ゆーちゃんが何を考えたのかは分からないけどその上から鉛筆でなんども斜線が引かれていた．．．多分漏洩防止だらう。

．．．作りたい。ISをこの子と一緒に。ただそれだけ。この子に私の欲望を実現させるなどといったことはなく、「単純に」作りたい。どこまで極められるかを。

「これから作れるんだなあ」一緒に！そーいえば今頃どうなっているのかなあ？」

久遠家

「それで、祐希はどうしたいの（か）」

わあ、同時発言。流石私の両親、仲睦まじい。この年になってもら

ブラブなのはどうかと．．．ん？年齢？父さんはよくても母さんは言うとな怒られるなあ、うん。

それはさておき、奈々さんから昨日話し合った事情を説明してもらった。両親は動揺することもなく、比較的リラックスして聞いていた。途中感嘆の声を上げていたけど、それでいいのか両親よ。

「私は．．．なりたい。研究者に。私の手でISを作りたい．．．」

「じゃあ、水城さんよろしくお願いします。」

早っ。また息ピッタリ。どうなんだろうこの夫婦は。

「えーと．．．、本当にいいんですか？」

さすが奈々さん。重要だから念入りに確認してくれる。尊敬します。

「ええ、祐希がやりたいことを見つけたんです。それを助けてやらなくて親とは言いませんから。」

嬉しかった。私は世界で一番いい親を持っている。父さん、母さんのためにも頑張らなきゃ！奈々さんは両親の答えに対して

「分かりました。では正式に久遠祐希ちゃんを研究者として迎えます。それと給料についてですが．．．」

「ああ、それなら祐希の口座を作るのでそこをお願いします。」

「えっ、いいの父さん？」

そりゃそうだ、小学生にお金を渡すようなものだから。

「おう、祐希が頑張つて得るお金なんだ。研究にでも使えばいい。家族の分は父さんが働くから大丈夫、心配ない。」

嬉しいことに限りない。だから私は、

「分かった、ありがたく使います！」

「おう、頑張れよ祐希。それと水城さん、質問と意見があるので……。」

「はい、なんででしょうか？」

「学校は今まで通り通えるんでしょうか？」

「はい、それについては政府に承諾してもらい、世間に研究者になったことを伝えないよう配慮してもらいます。」

「分かりました、それと本人の希望に応じて昨夜のように泊まらせてもらってもいいですか？夜中に帰宅させたくはないので。」

「はい、もちろん構いませんよ。あとほかの小学生のように普通の生活を遅らせるよう配慮します。」

「有難うございます。それでは祐希をお願いします。」

「分かりました。ではお邪魔いたします。」

こうして約1時間に渡る契約が終わった。それにしてもどちらにも泊まれるのは嬉しい。研究所が校区内でよかった。

「じゃあ、父さん、母さん、研究に行ってきます。」

「ああ、無理しないようにな。」

「迷惑をかけないようにね。それと、いつでも帰ってきますい。」

「うん、ありがとうございます！行ってきますー！」

「」「いってらっしゃい。」「」

そして倉持技研へ歩いた。空は昼間なのでとても明るく、雲ひとつなかった。

「いい親持ったわね、祐希ちゃん」

「はい！そして自慢できる両親ですー！」

「じゃあ、束ちゃん待ってるだろうから急ごっかー！」

「はいっ！奈々さんー！」

研究室

「出来たああ！これがああ・・・ゆーちゃんの専用機の装甲だああー！」

研究室の真ん中に鎮座していたIS。まだデータ入力が終わって
いなかったが装甲が完成していた。その配色は白主体の黄色のライン。
装甲はとてもしャープなラインで形成されていた。

まるで『天使』のように・・・。

四話 最年少の研究者（後書き）

長かった。勉強、本気でやらないと終わらない・・・！
頑張ろう。

次回はIS学園試験前まで飛びます。
感想よろしくお願いします。

五話 白董くシロスミレく（前書き）

テスト終了！

テストの詰めは見直しではなく機体構想を練っていました（笑）

ネーミングが難しいのなんの・・・誰か知恵を！

ではどしどし。

五話 白董くシロスミレく

アタシが研究者になって数年の時が過ぎた。今の私は高校受験生。周りは日々勉強に取り組んでいたけれど、アタシは全くと言ってもいいほど勉強していない。

なぜか。

『IS学園』を受験するからだ。

アタシは小学生の頃からISの研究をしていたものだからほかの受験者より豊富な知識、それと研究するたびに試運転もしていたため操縦技術も自然と付いてきた。もちろん、普通の教科も入学すれば勉強する。

でも、勉強する必要がない。小さい頃から理解力と記憶力、柔軟な発想力はずば抜けていたから教科書を軽く読み返すなどをすれば問題はない。

ということで私は自分自身に感謝しながらISの研究をしていた。現在10時。しかしアタシは度重なる徹夜ですぐにも寝てしまいそうだった。すると手元にあったケータイが軽快なりズムを奏でながら電話を受信したことを告げている。その液晶パネルには見慣れた人物の名があった。

『篠ノ之 篤』

アタシは頑張っつて腕を伸ばしボタンを押した。

「もすもす・・・？」

「もす？元氣無いな祐希。ちゃんと寝ているのか？」

「ん、寝てないよ。只今絶賛3日連続徹夜中」

「おいおい、大丈夫なのかそれで・・・？まあ、それはおいといて」

おいとくのっ！と心の中で突っ込むアタシ。

「それで祐希は何処を受験するんだ？」

「え、知らないの？」

「知らないぞ」

そりゃそうだ。教えてないんだもん。

「ん〜と、IS学園」

「本当かつ？そうかそうか、よかつたあ・・・」

「なんで？」

「知っている人がいると安心するからな」

「まあ、それもそーだねえ」

アタシも周りが知らない人ばっかだったら孤独で死んでしまいそう
だ。いや、兎じゃないけど。

筈がIS学園に入学するのは当然だろうとも思っていた。なにせ

実の姉がISの開発者』だからだ。

「でも、また篝ちゃんと生活できると思うとアタシはとても楽しみになってきましたよ？」

「私もだぞ祐希。しかしいつ受験なのだ？」

「明日だよ」

「ええっ！？ごめん、こんな時に掛けてしまって・・・」

「謝らなくていいよっ、むしろこんな時に掛けて欲しかったよ」

「え？」

「アタシは篝ちゃんとこーやってお話するのがとても楽しいから。それに篝ちゃんに会えるならこのくらいの試験どーってことはない
「！」

「このくらいの試験って・・・でもありがとう、祐希。じゃあ、またな。こんどは・・・」

「「IS学園でっ！！」」

「「・・・フッフ、じゃあまたね（な）」」

通話を終えたアタシはケータイを机に置き、ベットに身を投げ、仰向けになった。

「・・・でも、実際は合格したようなものだけだね」

実際のところ私は束さんから強制入学．．．ゴホッゴホッ、推薦をもらっていた。でも非公式なもんだから出向かなければならなかった。IS学園の試験にはISの試験稼働・教員との実践も含まれている。束さんはそこで私の専用機を渡すらしい．．．「ゆーちゃんにはいっくんと篝ちゃんを守ってもらわなきゃ！これはそのための剣だよっ！」のことだ。

あれ以来私はあの機体と会っていない。どうなっているのかとても楽しみだ。

次の日アタシは試験会場にいた。しかし専用機を貰うので最後になると千冬さんから連絡があった。束さんが教えたのかな、きつと。そんな訳でアタシは施設を暇つぶしに回っていたのだけど．．．

ありえないことが起きた。ある待機室になぜか一夏くんがいる。しかもISが反応している。

「何やってるの？一夏くん？」

「祐希．．．動いてしまった．．．ISが」

この瞬間束さんが言った「いっくんを守ってね」の意味が全て分かった。

「はああああああ．．．」

色んなこともあり最後のアタシの番になった。放送で指定された待機室に向かっている。

「ここかなあ？」

扉をひらくと二人の影が見え、その奥に『物体』がある。

「やっと来たか。祐希。」

「やあやあ、ゆーちゃん！久しいねえ〜。実際に会うのは何年ぶりかなあ？」

黒いスーツをピシツときめた黒髪の織斑千冬さんとうさみみ力チユーシャをつけた篠ノ之束さんがいた。

「さっきは一夏がすまなかったな。．．．あとで罰を与えるとしてよ。」

「．．．ほどほどにしてくださいよ？」

「わかっているさ、冗談だ」

全然冗談に聞こえないのは何故だろうか？

「ふっふっふ．．．ついに完成したよ！ゆーちゃん専用ISS！その名は．．．^{シロスマレ}白董！」

束さんが言った瞬間、後ろの『物体』にライトが当たった。

「白蓮・・・」

アタシは思わず呟いた。その機体の美しさに・・・

五話 白董くシロスミレく（後書き）

祐希は和利夫さんのツバメさんを引用しています。唯一の違いは転生者でなく、中身も女の子というところです。

次回は白董の戦闘描写を書きたいと思います。

六話 初対戦（前書き）

そのまま流れで書きました。

ではでは。

六話 初対戦

白董・・・そう呼ばれる機体はとても美しかった。

機体は白で構成され、比較的シャープなこの機体に黄色のラインが入っている。

白董・・・花言葉は『誠実』。その意味は機体に合っている。何より動きを邪魔とする部分が見当たらない。アンロック・ユニットであり、機体の推進力として使われるウイングスラスターも白主体の輪郭が黄色のラインで構成され、それは天使の翼として見れる。

「それではゆーちゃん、フォーマットとフィッティングをはじめよつか！」

「さて、束。」

「なにになに？ちーちゃん」

「あいにくだがこのアリーナは使用時間が決まっている。時間が無い。仕方ないが祐希には実践でもらうしかない。」

「なんだとお！？」

「そっかー。まあゆーちゃんならできるさ」

他人事のように言ってくれるなあ。まあ仕方ないかな、うん。

「わかりました。できるだけ頑張って見ます。」

「ゆーちゃんには期待してるよ！」

「すまないな、祐希。頑張れよ。」

「はいっ!!」

アタシは白董を展開してカタパルトへと移動した。後は相手の準備を待つだけ。取り敢えずどんな機体なのかな？そう思いアタシは機体のスペックデータを表示した。

コアナンバー003 . . . 白董 初期設定
武装 . . . 近接ブレード×1 ハンドピストル×2

機体詳細は初期設定の為開示できません。

「やっぱり初期設定のままだとダメかあ . . . 。出来るだけ動いてフィッティングを円滑にしないと . . . 」

「試験を開始します。受験者、久遠祐希さんはアリーナに出てください。射出タイミングを譲渡します。」

「はい、では行きます！」

心地よいGが身体にかかる。最初は苦手だったがもう慣れていく。アタシは5秒と掛からず上空にでた。

「それでは機体テストを行なってください。自由に動いて構いません。」

アナウンスを聞き、ターンや急上昇、急下降など基本動作を行なった。やはり専用機というだけあり、思うように動いてくれる。

「では、実技戦闘を行います。相手はIS学園教師、山田真耶先生です。」

「久遠さんですね。よろしくお願いします。」

「はい、こちらこそ。」

「では・・・始めっ！」

試合開始のブザーが鳴った。

「よし、行きます！」

「どうぞー！」

キーンー！！

開始早々、アタシと山田先生は近接ブレードを展開、加速して競り合いとなる。ちなみに山田先生はラファール・リヴァイヴを使用している。

「さすがですね、久遠さん！無駄がありません！」

「ありがとうございますっ！」

そう言いながらアタシは空いている左手にハンドピストルを展開。競り合いながら撃ちまくる。

「くっ！やりますね、でもっ！」

山田先生は即座に反応して左肩のシールドユニットを前にせり出した。同時に右手の近接ブレードを収納、アサルトライフルを展開し反撃してくる。

ダダダダダダダ！！

ほとんどの弾がアタシのシールドバリアに当たる。

ダメージ67、シールドエネルギー残量、733。実体ダメージレベル低。

「くっ！！（まだシールドエネルギーはあるけど長期戦はやばいかも・・・接近戦に持ち込もう。）」

アタシは銃弾をランダム回避で避けながら突っ込んだ。しかし、それが甘かった。

「近づきすぎですよっ！」

叫びながら山田先生はアサルトライフルを収納、両手にハンドピストルを展開し連射してきた。

「っ！きゃあああ！！（このままじゃ終わってしまう・・・！）」

ダメージも今ので重なり、シールドエネルギーも半分までなくなる。

誰もが山田先生が勝つと思っていた。だが・・・

フィッティングが完了しました。一次移行ファースト・シフトを行います。

「（待ってたよ！白董！）」

アタシは囷にハンドピストルを両手に展開、銃弾の嵐に投げ、小爆発を起こさせた。山田先生もこれには驚きダメージを食らった。

高粒子圧縮エネルギーシールド展開。

その瞬間、私は目の前が真っ白になった。

目を開けると周りは曇一面。上には青い空が広がっていた。

その雲の上に白いワンピースの一人の少女がいた。アタシはその子に向かって歩いた。

「あなたは誰？」

私は唐突に尋ねた。その少女は振り向き笑顔で答えてくれた。

『私はあなたのIS、白堊の制御人格！』

「あなたが？アタシは久遠祐希！よろしくね・・・名前は？」

『私には名前がないの・・・だから名前を付けてくれない？』

「そうねえ、ん〜と。スマレってどう？呼びやすいし、白堊だからね」

『うんっ！ありがとう！よろしくねっ！それとこの世界から出たら私とはプライベート・チャンネルで会話できるよ！』

「分かったわ。そういえば一次移行って終わったの？」

『うん！たつた今終わったよ！それじゃあ・・・』

「『行こっか！』」

「ここはビット。今は千冬と束しかないが。」

「ほう、ハンドピストルを投げ、煙幕がわりにしたか。」

「さすがゆーちゃん！それに一次移行が始まったね！」

ビットや山田先生からの視点で見ればそれは不思議としか言いようがなかった。

通常よりも強固なシールドバリアを張り、そのバリアにはIS関係の語句がまるで中を見せないように流れていた。

「これは・・・コアナンバー003の効果か？」

「うーん、よくわかんないね。あのコアはゆーちゃんが調整していたからね。面白いからそれで十分だよ、束さんは！」

「・・・はあっ」

呆気ない回答にため息をつく千冬だった。

「どーやら、終わったみたいだね。ちーちゃん」

「そうだな、ここから見物だな。」

煙がほとんど消えた先に白堊は居なかった。誰もが驚愕していたが、ひとつの影がありその先を見上げる。

太陽に被っっていてそれは『天使』だった。

ウイングスラスターが初期設定から、より天使の翼のように曲線を描いていた。その翼には羽の代わりにビットが付いている。

さらにウイングスラスター上部にアタッチメントが新たに付き、そこには二本のソードが装着されている。

「山田先生．．．遅れました。いつでもOKです!」

「はいっ！それでは行きましょう!」

「行きますっ!!（スマレ、最大出力！同時にショートソードを両手に展開してっ!）」

『オツケー！任せて!』

白董は初期設定の2倍ほどの加速をして突っ込む。そして、山田先生の横を通り過ぎる。

山田先生はその加速に追いつけず、また通り過ぎた衝撃が襲う。

「くっ!!（なんて加速力！これは第三世代トップレベルでしょうね．．．。）」

通り過ぎた瞬間白董は反転し、ショートソードを投擲する。

それはまとも当たりシールドエネルギーが削られ、一瞬怯む。

その隙を見逃さずウイングスラスターから二本のソードを取り、切りつける。

しかしそれを予測していた山田先生は後ろへ下がり、ハンドピストルからアサルトライフルに換装して撃つてきた。普通ならばよけることができない・・・だがそれは「普通なら」だ。

「（スマレ！シールドビットをショルダー・シールドモードにして両肩装着！）」

『分かった！シールドビット、展開！』

一瞬にしてシールドを形成。全弾を防ぐ。当然、山田先生は・・・

「そんなっ！一瞬にして!?!」

という反応をする。だがその反応が勝負を決めた。

シールドは肩に付いている。つまり両手にはソードが握られている。

「今だっ！」

キーン！キーン！

重い斬撃が山田先生を襲い、そして・・・

「試合終了、勝者・・・久遠祐希」

六話 初対戦（後書き）

初めての戦闘描写でした。
疲れた。

感想お願いします。

七話 SunLight Drive System<ソルドライヴシステム>

機体設定にハマってしまいました。

しかし今回出るSLDライヴはネーミングに悩みました。

命名理由は単純ですけど。

それではどっぞー！

試験が終わったアタシはビットへ帰還し、ISを解いた。そこには既に千冬さんと東さんがいる。

「ご苦労だった。まあお前はどこかの馬鹿者の仕業で強制入学だな。入学までの間気を抜くなよ」

そういえばそうだった！もうちょっと気楽にやればよかったなあ……。でも帰ってきていきなりその発言はやめてください。あなたは鬼ですか？そもそも一夏くんにも同じ態度とつていますけど私にはどう見てもブラコン……

「今私の悪口を考えてたな？……次は特別組手をプレゼントしようか？」

前言撤回。申し訳ありませんでした。

ユウキ……。私はAIなのに織斑先生？から威圧感を感じるんだけど……

ほんと？……AIにも伝わってるってヤバくない？

そのうち私の存在もバレるんじゃないかなあ？

それはないでしょ。

.....。

.....。

「「ありえそつだっ!」「」

「ん〜ちーちゃん、ゆーちゃん終わったばかりだから休ませてあげなよ、ね?」

「?!.....そうだな、これぐらいにしておこう。それにしても祐希、動きが良かったじゃないか。」

「うんうん、束さんにとっては満足したよ〜。『アレ』は十分使えるね!」

「はい、アタシも初めて搭載したISに乗りましたが『アレ』は実践で十分使えますよ。あとちょっと微調整をして.....」

「おい?アレとはなんだ?」

千冬さんはアタシたちの会話に出てきた『アレ』の意味が解らないように質問してきた。

「『アレ』とはですね.....正式名称SunLight Drive System.....通称SLドライブソルトライヴです。」

「聞いたことがないな。どんなシステムなんだ?」

「はいはい！それは私に任せてちーちゃん！厳密に言うとシステムよりエネルギー機関なんだけどね。これはね『自由に粒子を生成する』機関なんだよ。」

「自由に？どついうことだ？」

千冬さんは頭を傾げる。

「それはアタシが説明します。これはアタシが考えた理論で束さんと開発した粒子を制御する機関なんです。『自由に』とはですな簡単に言っちゃえば『粒子の増幅を任意で可能にする』ことが出来るんです。他にも粒子を圧縮・収束して高濃度にするとかが出来ます！」

「．．．それはいくらなんでも異常ではないか？」

「でもねでもねっ、ちーちゃん。これには欠点の一つに生産がゆるちゃんと私しかできないんだ」

実際この機関はまだ発表していない。というよりまだ欠点が沢山あって発表できないんだけど。その欠点に機関を構成するための物質が入手困難というのもあるんだけどね。

「なるほど、だからあの加速を実現でき、どこにも例が無かったのか。納得ができるな。しかしなんで『太陽の光』なんだ？」

納得してもらえて良かったです、はい。ネーミングはねえ．．．

「放出される粒子が太陽の様に輝いていて、名前決まってなかった

からです。」

「・・・さて、これで入試の全日程が終了した。今日もこれで終わりだ。東、祐希。今日はもう帰ってもらって構わない。それと祐希、学園では織斑先生と呼ぶように。分かったな？」

ええ、聞いておいてシカト!? それはないでしょ。でも疲れたしね。早く帰りたいね。

「はい、分かりました。じゃあ千冬さんお疲れ様でした！」

「じゃね、ちーちゃん!」

「ああ、お疲れ様」

アタシと東さんは途中公園に寄って帰ることになった。

「それにしてもゆーちゃん、あの飲み込みの早さに東さんはびっくりだよ?」

「フフツ! ありがとーございますっ!」

「そうそう、これ。今日の戦闘でのSLドライブの改善点をまとめといたから、使って!」

東さんは一つのメモリースティックをアタシに差し出してきた。

「えっ、いいんですか！じゃ、遠慮なく使わせてもらいます。」

「全然オツケーだよっ！その代わり『紅』についてのデータを端末に送るから、感想と改善点を出してね？」

「はい、もちろんです！」

「じゃあゆーちゃん、またねっ！」

そう言つて東さんはものすごい速さで去っていった。絶対、ISFつけてるな。

ねえユウキ？

なあに？

篠ノ之博士って何者？

天才だけど、千冬さんの言葉を借りるなら「馬鹿者」じゃないかなあ？

ああ、なんか理解できるよ……。

そうだねえ……取り敢えず帰ってお話しながら再調整しようか。まだまだだしね。

うんっ！了解！

もう空は赤くなり始めていた。

七話 SunLight Drive System<ソルドライブシステム>

もうそろそろ本編に入れそう・・・かな？
次の次に入ると思います。

感想をお願いします。

設定（前書き）

取り敢えずまとめてみました。

設定

名前：久遠 祐希くわん ゆうき

年齢：15歳

身長：160cm

体重：50,5?

性別：女

髪：ショートの黒に近い紺

瞳：黒

容姿：上の中

IS適正：S

国家：自由国籍権（現在は配属されてない）

好きな

人：友達

食べ物：甘い物

物：IS、人の喜ぶ顔

嫌いな

人：敵対する人

食べ物：とても辛いもの

物：織斑先生の鉄拳&出席簿アタック

性格：基本誰とでも仲良くなれる。人をからかったりするのが趣味。友達と思った人は名前前で呼ぶようにしている。助けを求めていれば敵でなければ助ける。

生い立ち：小学生にして倉持技研の研究者となった天才。理解力と記憶力、発想力に長けている。ISの技術開発について専門はAI・

自立機動兵器・S Lドライブ。ISの操縦技術は開発するにあたって乗ってきたため常人より高い。

コアナナンバー003・・・シロスキレ白董 第3世代型試験機 現在第1形態

防御・接近戦に重点を置いて開発された高速機動型試作機。カラーリングは白に黄色のライン入り。アンロック・ユニットのウイングスラスタは00のアリオスの背部のウイングユニットを外した状態。その外したウイングの間はアリオスは空洞だが、そこにピットを接続させ翼を再現させている。装甲はミステリアス・レイディ並みに薄い。それによる軽量化で機動性を大幅に上げている。

武装

ロングソード

ウイングスラスタ上部のアタッチメントに装着可能。計2本。ロングとあるが大きさは雪片式型・雨月・空裂並みの大きさで、下記のショートソードと区別するため。現在は実体剣。

ショートソード

リアスカートに装着可能。計2本。大きさは00のエクシアのGNショートブレイド並み。現在は実体剣。

ハンドピストル

リアスカートに装着可能。計2個。S L粒子をビームとして発

射する。取り回し、連射に優れているが、威力はライフルより低め。

シールドビット

ウイングスラスタに常時装着。計8機。装着時はスラスターとして機能する。SL粒子の貯蔵をすることができ、ある程度なら自立移動が可能。表面にビームシールドを展開できる。貯蔵している粒子がなくなりかけると、ウイングスラスターで補給される。ビット間での接続枚数により機能を変更する。

1・2枚・・・遠隔操作による展開でビームシールドを発生する。
3枚以上の接続も可能。

4枚・・・シオルダー・シールドモードとなり、肩に装着可能。
操縦者の許可によって他機体にも装着可能。

ビームフィールドモード

シールドビットを8枚展開し、自分の周りにビームフィールドを形成。ただ、SL粒子を消費しやすくなるので自機以外の展開は望ましくない。

補助AIシステム

制御人格が表に出てくる。AI名『スミレ』
武装展開、期待制御などの補助を可能とする。AIとの会話は外部音声、プライベート・チャンネルで可能。待機状態でAIのホログラフィックを投影可能。他設定有り。

オーバーブースト

シールドビットをすべて解除し、貯蔵しているSL粒子+生成したSL粒子を放出する。その間シールドビットはシヨルダー・シールドモード、または両腕・両足に1機ずつ装着し、1枚シヨルダー・シールドを形成して対応する。スミレによる展開も可能。

オーバーブースト時は機動力が格段に上がる。放出したSL粒子は光学兵器（ビーム兵器やレーザー兵器など）の威力を弱める効果がある。機体は金色の粒子で覆われる。途中解除、限定発動も可能。

設定（後書き）

12月22日改訂しました。

次は本編です。いろいろ考えてます。

感想をお願いします。

八話 お茶会 i n I S 学園私室（前書き）

週末です。待ちに待った週末です。

やっと休める。何話書けるか楽しみです。

入学の前に一話入れることにしました。すみません。

ではござい！

八話 お茶会 in IS学園私室

入試から半月ほど経ち、アタシは明後日が入学式だから入寮することに決めた。IS学園は全寮制。だからアタシは早めに家を出て入ることにした。今準備が終わったところ。

「母さん、準備終わったから行ってくるね」

玄関で靴を履きながら後ろで見送ってくれる母さんに言った。

「もうあの頃からこんなに時間が経ったのねえ……。やるからには頑張りなさいよ？いつでも帰ってきなさい、楽しみにしてるから」

「うん！じゃ、いってきまーす」

「はい、行ってらっしゃい」

アタシは大きめのバッグを肩にかけドアを開けた。

さあ、出発だ！

家を出て小一時間。やっとたどり着いたよ……。IS学園。校舎はとても綺麗だった。案内図を片手に事務室へと向かった。その途中で見たことのある人に会った。

「．．．山田先生？」

「はい！．．．あつ、久遠さん！お久しぶりですね。そして合格おめでとうございます！」

やや大きめの傾いた眼鏡を上げながら挨拶してくれた。

「ありがとうございます！すみませんけど事務室はどこですか？入寮するので．．．」

「構いませんよ。なにせ先生ですから！」

自信満々に答えてくれた。うん、やっぱりこの人は人受けがよさそうだね。

山田先生はそのあと入寮許可の手続きを手伝ってくれた。有り難いです、本当に。

「それでは、入寮が承諾されました。改めてこれからよろしく願いいたしますね。それではこれが久遠さんの部屋鍵です。ちなみに久遠さんの一人部屋です」

そう言っつて鍵を渡してくれた。

「ありがとうございます、色々してもらって。申し訳ないです」

「気にしなくていいですよ。ちなみに久遠さんは1組で担任は織斑先生、副担任は私です！」

わお、千冬さんが担任か．．．気を付けよう。

ちゃんと勉強しないといけないね。

そうだね。．．．はああああ。

ドンマイ、ユウキ。

「それとこれを渡します。トラブルが生じたら私か織斑先生に連絡してくださいね?」

そう言っつて携帯電話を渡された。

「じゃ、これで失礼します。」

「はい。では入学式で会いましょう!」

数分歩いて自室のフロアに到着。えーっと、1026号室、1026号室と、あった。鍵を開け部屋に入る。

「広っ!しかもバスルームや簡易キッチン、ベットもある!さっすが国立!」

一人で使うのにはとても広かった。取り敢えずアタシは事前を送っていた荷物や持ってきたバッグの中身を整理した。数十分で作業は終わった。取り敢えずお茶にしようかと思ったら．．．

コンコン。

ノックが鳴って私は誰だろうと思いつつドアを開ける。

「わあ、ビックリだよ。こんにちわ。」

小動物がいた。とゆーかこの子は確か……

「えーと、あつ、布のほしほんね仏本音さんかな？」

「む、なんで知ってるの？久遠祐希博士？」

「あなたもなんで知ってるの？」

「それはね……」

アタシは彼女に近づき耳元で言った。

「更識家専属で仕えていて、情報網に詳しいから？」

「……む、よくご存知で。博士も裏の情報に詳しいのかなあ？」

「ううん、たまたま見ただけだよ。お茶していく？ちょうど暇だしね」

「えっ、いいのお？じゃあ遠慮なく、おじゃまします。」

アタシはお茶の準備をして、ティーセットが乗ったトレイを持っていった。

「あゝ、ありがとおゝ。いただきまゝす。」

「はい、どつぞ」

少し紅茶を飲み、会話を楽しむことにした。

「ねえ、博士はちょっとね・・・」

「じゃー、ユツキーでどゝかなあ?」

「じゃそれでいいよ。アタシは本音ちゃんていいかなあ?」

「ぜーんぜんいいよおゝ。そーいえばユツキーは専用機あるのおゝ?」

ものすごいローペースで喋っている。ものすごくリラックス出来るんだけど・・・

「うん、白董って言うの。ちなみに第三世代型試験機だよつ!」

アタシは白董の待機状態の白い指輪を見せながら言った。

「ふゝん、ぜひぜひ見てみたいよおゝ。」

「ダメだよつ、勝手に展開したら怒られちゃうでしょ?」

「それもそゝだねゝ。」

こんなスローペースなお茶会を夕方まで楽しんだアタシたちだった。

時間は8時。夕食・お風呂を終えてベッドに腰掛けた。

「ねえスマイレ？」

『なあに？』

今は誰も居ないので外部音声・ホログラフィックを出して会話している。

「アタシの考えた武器やプログラムをスペックデータ化したり、設計図を作ったり出来る？」

『うん！入力さえしてくれたら数十分かかるけど出来るよ？』

「そう、ありがと。じゃあ何かアイデア思いついたら言っね」

『はあ〜い。』

会話を終えてベッドに身をあずけることにした。うん、入学式が楽しみなね。そう考えながら深い眠気に意識を任せることにした。

八話 お茶会 i n I S 学園私室（後書き）

のほほんさん登場しました。

なかなか存在感あるので、はい。

次は入学式です。

感想よろしくお願いします。

九話 入学初日 part 1 (前書き)

二冊目書くぜ！

Let's go!

九話 入学初日 part 1

一夏side

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはショートホームルームはじめますよー。それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がないいや、多分俺のせいなんだろうが。

「じゃ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で。」

先生うるたえてるよ……。反応するべきか……。いや、そんな余裕はない……！

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。つまり男は俺一人。やはり……

(これは……想像以上にきつい……)

助けを求めよう、それが無難だ。まずは……と筈だな。俺はちらっと窓側にいる幼なじみ……篠ノ之箒に目をやった……。助けてくれっ！

だがその願いは叶わなかった。

視線を送った瞬間、．．．薄情なことに篤は窓の外に顔をそらした。なんてやつだ。六年ぶりに再開した幼なじみに対する態度だろうか。この世界に神はいない。．．．いやいや、もしかして俺嫌われているんじゃないか？

篤への救援c a r i e r失敗。

ならばもう一人の幼なじみだ。祐希だな。確かあいつは．．．右後ろだ。頼む！今度こそ．．．ん？

俺は教室の後ろ端にいる幼なじみ．．．久遠祐希に目をやったんだが。

口を両手で抑え、声を殺し、ややうつむいて、小さく震えている。

(あいつ！苦しんでいる俺を見て楽しんでやがる！)

「．．．．．くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいつ!?!」

裏返った声を上げてしまった。うゝむ。周りからくすくすと笑い声が聞こえる。無論祐希もその内に入る。

「あつ、あの、大声出しちゃってごめんね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね。でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。自己紹介してくれるか

な？だ、ダメかな？」

「いや、そんなに謝らなくても……。」

さつきからむちやくちや頭下げてる。罪悪感が……。よし、気を取り直そう。まず、後ろを振り向こう、そこからだ。

(うつうつ……)

背中への視線と真正面の視線は違う……！くそっ！全員して……。ああもう、やればいいんだ！

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

ってあれ、なんだよその『もっと色々喋ってよ』的な視線は……。それに、

「これで終わりじゃないよね？」

……！？祐希の奴、追い討ちかけやがった！しかも全員その言葉に賛同してるし。

「……………」

どうすりゃいいんだよ……。

祐希 side

(あー、一夏くんの反応面白すぎっ!)

さっきから一夏くんの背中がちっちゃく見える。

(ダメだ、我慢できないっ!)

必死に堪えて、口を両手で抑え、声を殺し、ややうつむいて、小さく震えている。

「えー……………えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします。」

えっ、それで終わるつもりかなあ？祐希さんが追い詰めてしんぜよ。

ユウキ、いじめすぎだよ……………

このくらいが一夏くんにはちょうどいいのよ

そうなの？

そうなんです。

「これで終わりじゃないよね?」

あはっ、一夏くん震え上がったよ、面白っ!……………あ、深呼吸してる。

クラスのほとんどがその行為に息を呑む。しかし期待はずれだった。

「以上です」

がたたつ。あちゃー、一夏くんそれは無いでしょ。

「え？あれ？ダメでした？」

ドンマイ、一夏くん。後ろには『あの人』がいますよ？

パンツ！凄まじい威力だね、千冬さん。いや、「織斑先生」。あ、恐る恐る後ろを向いてる。結果は変わらないのね。

「げえつ、関羽!？」

あ、それはダメ。

パンツ！本日二度目。一夏くんの脳細胞さん1万人お亡くなりになりました。ご愁傷さまです。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

まあそのあとは言うまでもなく、世界最強の千冬さんの登場で1 - 1は黄色い歓声で包まれるのであった。

1時間目のIS基礎理論授業が終わって、アタシは篝ちゃんの所へ行くことにした。

「ほーおーきつ！」

「祐希か、久しぶりだな。」

「その口調も相変わらずだねえ。一夏くんの為にここまでや」・・・んぐつ！？」

篝ちゃんはものすごい速さで口を封じてきたっ！

「なっ、ななななにを言ってるんだ、そ、そそんな訳ないだろう！？」

しかしアタシはうまくすり抜けた。

「・・・ぶはっ。でも事実でしょう？しかもバレバレだしねえ？」

「・・・！？そ、それは・・・」

「好きなんですよ？」

「・・・う、・・・ん。」

「もう話したの？」

「い、いや、まだだが・・・っておい。どこに行くんだ」

「アタシがきつかけを作ってしんぜよ」

「なっ、なあっ!?!」

「いいから付いてくるの。いーちーかーくーんっ!」

アタシたちは机に突っ伏してる一夏くんのそばまで来た。

「な、なんだ。祐希、箒……。」

「あれえ、あれあれっ? 疲れてるのかな? ひつどい顔だちしてるねえ」

「お前笑ってたろうがっ! 人の苦勞を笑いやがって……。」

「いやいや、あんな自己紹介したお馬鹿さんが悪いんじゃないの? 違っ?」

「うぐっ!?! …… 全くもってそのとおりであります」

「よろしい。そうそう、箒ちゃんが話があるってさ。ほら」

ここからは箒ちゃんにバトンプラスだっ! 頑張れっ!

「あ、ああ。一夏、その…… ちょっといいか?」

「ん? あ、ああ。屋上でいいか? ここは辛いし」

「ああ、任せる」

「いつてらっしゃーい。」

そう言つてアタシは二人を見送つた。うん、篝ちゃんは素直じゃないねえ。．．ん？

視線を感じる．．あの子は確か．．思い出した。4組の「更識簪」さんだ。確か日本の代表候補生なんだけど専用機がないつてあつたような。視線の方向は、つと、一夏くんの席か．．。もしかして．．。

「ねえ、本音ちゃん？」

「なに、ユツキィ？」

「更識簪さんの専用機の開発元つてわかる？」

「えつとね、おりむとおなじだよ。」

やっぱりか．．よし、ちよつと頑張りますかっ！

「ありがと。んでさあ、ちよつと教えて欲しいことがあるんだけど．．」

「なあに？」

「気配の消し方」

「それはね、」

「なるほどね、やってみますか！」

「がんばれ、応援してるぞ」

簪 side

(織斑一夏・・・あの人のISで私のは・・・)

1年4組の更識簪は『監視』するために1組に出向いていた。・・・
と言っても教室の外からだが。

(クラスメイトが連れていった・・・戻ろう。)

そう考えた瞬間だった。

「更識簪さん」

(!?!?・・・いつの間に背後に。しかも私に気づかれずに・・・)

「ちなみにね、本音ちゃんに教えてもらったんだ。・・・気配の
消し方。」

(確かに本音ならできる・・・。本音が知っていることが分かるな
ら・・・。)

「あ、あなたは・・・久遠祐希・・・？」

「うん、そうだよ。そうそう、はいこれあげる。」

渡されたのは小さなメモ。

「・・・なに?・・・これ」

「アタシの部屋番号だよ。放課後來てくれない?相談に乗ってあげるから。・・・専用機について」

「・・・!?!?」

「じゃあ、待ってるからね」

「・・・待つて!」

「ん?なに?」

「・・・なんで、・・・なんで相談に乗ってくれるの?」

「・・・アタシは困ってる人を放っておけないんです。ただそれだけ。じゃね」

そういつて彼女は戻っていった。

(・・・あの人なら、あの人なら一緒に考えてくれるかもしれない・・・)

そう思っていると予鈴のチャイムが鳴り響いた。

九話 入学初日 part 1 (後書き)

長くなった。

2・3回に分けて初日を書きます。

多分これは異例だろうと思う。

和利夫さん使わせてもらいました。

感想お願いします。

十話 入学初日 part 2 (前書き)

祝！十話！

ではございぞ！

十話 入学初日 part 2

祐希 side

二時間目が終わった。アタシが一夏くんところでISの授業内容について話していると・・・

「ちよつとよろしくて？」

む、誰だこの人。まあいいや、ただでさえ一夏くんはやばいから。それもそのはず参考書を電話帳と間違え捨ててしまったのだ。さすが一夏くん。

ユウキ、反応してあげなよ、ね？

そうだったね！

「いや、よろしくないです。」

さっすが一夏くん！息ピツタシ、完璧だね。アタシと一夏くんは軽くハイタッチした。よし、勉強再開だ、悠長などしている暇はない。

「・・・わたくしを無視するのですか？」

少しキレ気味に言ってきた。さっき返事したのになあ。

「すまない、今そんなに時間がないんだ」

「一夏くんやばそうだから教えてるの、邪魔しないでくれますか？」

「・・・！？貴方、わたくしを邪魔だとおっしゃいますの？」

言ったのに何度も言い返しやがって・・・という顔の一夏くんがそこにはいた。

「まず、君のこと知らないし、すまないな」

「ごめんね、アタシも」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「へえ、セシリア・オルコットさんね（か）」

よし、名前が分かった。覚えておこう。しかしこのタイプの人間はアタシは苦手だ。ISという力をもったからといって見下すのは良くないと思うなあ。それには一夏くんも同意見だったみたいで。また以心伝心の証としてハイタッチをした。

「で・・・このハイパーセンサーというのはですね・・・」

「ふむふむ、おお。なるほど。分かってきたぞ。お前教え方上手いな、だからこれは・・・」

「ちょっと！聞いてますの？」

全く、あなたこそ人の話を聞いていないの、と言いたくなる。

「なあ、セシリアさん・・・だったか？質問いいか？」

おっ、一夏くんナイスタイミング！

「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

あー、やっぱり苦手だ。というより何を質問するのかな？

「……………代表候補生って、何？」

がたたっ！聞き耳を立てていたクラスの女子数名＋セシリアさんがずっこけた。アタシは軽いため息をつき教えることにした。

「って一夏くん、それさつきやったでしょ？前のページ」

「え？あ、ホントだ。なにに、『国家代表IS操縦者の、その候補生として選出される人のこと。』か。よし、覚えたぞ。」

「よくできました」

「そう！エリートなのですわ！」

あ、復活した。でもさあ、

「候補生でエリートは無いんじゃないかなあ？そしたら代表の立場が分かんなくない？」

「う……。で、でも本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「まった、一夏くん。私も一応それ相応の立場なんだけど……。」

「あ、そうだった。祐希もIS持つてるんだっけな」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だつて言ったんじゃないか」

なあ、と言いながらアタシに振る。

ナイス！軽くサムズアップする。今は効いたね、うん。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思ってましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「そもそも入試の時に初めて動かせたんだからそれは無理な期待じゃない？」

「う……。ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわよ。ISのことで分からないことがあれば、まあ……。泣いて頼まれたら教えて朝仕上げてよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「わからないことがあれば祐希に聞けばいいしなあ。そういえば入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

待って、確かそれは、アタシは・・・

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・？？」

「えっ？一夏くん倒したのっ!？」

「いや、倒したっていうか、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなったただけだが」

「一夏くん・・・それは倒したとは言わないでしょ」

「ん？そういえばそうだな」

「わたくしただだと聞きましたが？」

話について来れなかったらしい、セシリアさんは。無理もないかなあ、シヨックだったみたいだし。

・・・あれ？

「女子っではってオチじゃないのか？」

「そうだった！アタシも教官倒したんだっ！」

「え？祐希もなのか？」

「は……………？」

「アタシの相手は山田先生だったんだ。もうギリギリ勝ったってところ」

「っ、つまり、わたくしだけではないと……………？」

「うん、まあ。たぶん」

「いや、アタシは倒したから多分じゃないよ」

キーンコーンカーンコーン。

あ、3時間目開始のチャイムだ。全然出来なかったなあ。

当然みんな、織斑先生に叩かれたくないので素早く席についた。

「それではこの時間は使用する各種装備の特性について説明する」

千冬さんの授業か……………なんか参考になりそう。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生がいうには、対抗戦だけでなく生徒会の開く会議や委員会への出席……クラス長のようなものらしい。まあ、アタシはしないけど。で、ありそうなパターンは……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「えっ!?!」

「私もそれがいいと思います！」

「なあっ!?!」

やっぱりこうなるよねえ。一夏くん慌てすぎ……。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!?!ま、まってくれ!?!じゃあ、俺は久遠祐希を推薦します！」

うん、今のは聞き間違いだね。

「しかも、祐希は中学校三年間連続で学級委員でした！故に適任だと思います！」

なあっ!?!アタシを売りやがったああああ！

「ほう、それは頼もしい限りだな。どうだ、他にいないのならこの二人で投票を行うか？」

うわあ、ヤバイヤバイ。

「待ってください！納得いきませんわっ！」

声の主・・・セシリア・オルコットだった。アタシと一夏くんは胸をなでおろした。

「そのような選出は認められません！久遠さんはともかく、大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

よし、そのままなっちゃえ!・・・つてあれ？

「・・・大体、文化としても後進的なくで暮らさなくてはいけないこと自体わたくしにとって耐え難い苦痛で」

カチン。あつたま来た。それは一夏くんも同じみたいだ、だから言っていた。

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

よく言った!

「あつ、あつ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますの!?! 決闘ですわ!」

Bannon!!

机を叩いたのは・・・アタシだった。

「あ？ちよつと待てや。ふざけないでよ？まず私たちの祖国を侮辱したのは誰だったっけ？ねえ？」

いきなりのアタシの行動にクラス内が静まり返った。無論先生も驚愕している。

ユウキ・・・それはやりすぎじゃ・・・

大丈夫、計算のうちだよ。威圧させておいたほうが動かしやすいの。

・・・ほどほどにね

りよーかい

「・・・!!?・・・そ、それはっ」

「質問に答えられないのかな?・・・本音ちゃん。誰だったっけ、侮辱したのは?言っても大丈夫だから。このクラスにいる生徒、先生が証人だから。ね？」

本音は関係ないから語尾は優しく言った。

「ん〜と、せつしーだよ〜」

「つまり、セシリアさんだね？」

「そーだねー」

「だってさ、セシリア・オルコットさん。決闘かぁ．．．私も参加させてもらえるかなあ？参加理由は『ここにいる日本人の代わりに戦う』ってことで」

「それなら俺もだ。『全世界の男を代表して』ということだ」

織斑先生はニヤリと笑い、こういった。

「よし、話はまとまったようだな。オルコット、お前は二人から挑戦状を受けている。しかしお前に拒否権はない。自選だからな。ということであと週の今日．．．つまり水曜日に織斑対オルコット、次の日に久遠対オルコットだ。久遠、織斑対久遠の試合はいるか？」

「いえ、すべての結果次第で」

「ふむ、妥当だな。それではこの日程で行く。それと織斑。お前の機体．．．つまり専用機を学園で用意することになったんだが時間がかかる。頭にいれておけ、いいな？」

「．．．!?!?．．．はい、分かりました。」

「それでは授業に入る。テキストを開け。」

こうしてそれぞれのプライドを賭けた戦いが決まった。

十話 入学初日 part 2 (後書き)

眠いです。。。でも満足してます。
まだ初日編は続きます。

感想お願いします。

十一話 入学初日 part 3 (前書き)

いきなり寒くなって疲れが出てきた・・・。

ではどうぞー！

十一話 入学初日 part 3

祐希 side

取り敢えずクラス代表決定戦をすることに決定したので、授業が始まった。

．．．ん？なんでアタシも参加してるのかなあ？この原因って一夏くんのせいだよな？

その本人はやっぱり授業内容が解らないようで、隙を見て私にアイコンタクトしている。

全然分からん．．．。後で教えてくれ．．．頼む！

多分そんな事を言っているのだろう。だからアタシはこっぴどく切り返した。

アタシが戦わないといけなくなったのって．．．だ・れ・の・せいかなあ．．．！

一夏くんはアタシの瞳に修羅を見たようで、震えながら前に向き直った。

後でお話することにしよう。

空の色も赤くなりつつある放課後。取り敢えず色々？あった学校生活初日は終わり、アタシは寮の自室に戻り制服から私服へと着替える。青のジーパンに半袖のＴシャツを着る。ジーパンは短パンタイプ。

これが一番動きやすい。アタシは『あの子』を待つことにした。

「ちゃんと来てくれるかなあ〜？」

確かあの子のISは打鉄式うちがねじしき式しきって言ってたっけ。

スミレ？

なあに？

ネットワークを使って打鉄式うちがねじしきの開発元割り出せる？

オッケー。十秒ほどまって。．．．でたよ、ディスプレイで表示するよ

ありがとう

開発元は倉持技研か．．．ってうちの担当！？いつそんな開発してたっけ？開発期間は．．．ああ、その頃はSLドライブ作ってたっ

け。あれ以外の作業はしてなかった、うん。でも倉持技研なら、
よし、奈々さんに電話しよう。

ドゴオオオン！．．．バンツ！

電話しようと思った矢先、隣の部屋から凄まじい音が聞こえた。

「．．．！？何の音！？」

そう思つて部屋を勢いよく出ると．．．いかに飛び出してきた様
子の一夏くんがいた。その顔は青白くなっている。

「どーしたのっ！？一夏くん！」

「ゆ、祐希か！？頼むっ！アイツを止めてくれっ！」

「アイツ？分かった、誰かわかんないけど止めてきましょう．．．
あとでアタシもお話するからね」

一夏くんは思い出したかのように動きを止める。

「うっ．．．。分かったから、止めてくれ頼む！」

「りょーかいつ」

アタシはドアを少し開けすぐさま入り、閉じる。正面を向くと．．．
『木刀が突っ込んできた』

「うわっ！？でも当たらないよっ！」

アタシは横によけて、『木刀』の持ち主の腕をつかむ．．．ってあれ？

「．．．箒ちゃん！？ってちよつとその格好!？」

「くつ、よけられた．．．って祐希？」

突進してきたのは箒ちゃんだった。しかし問題はそれではない。

「バ、バスタオルでその動きってどうなの．．．、じゃない!なんでそんな格好してんの!?って、ま、まさか．．．!」

「ち、違う!何言ってるんだ祐希!私は何も．．．」

箒ちゃんは木刀を落とし必死に手振り身振りして反論した．．．．．
が、いけなかった。

箒ちゃんのバスタオルが床に落ちた。つまり．．．

「はあ．．．良かったね、箒ちゃん。『今』の格好見られなくて、
一夏くん」

「へ?．．．!？」

「取り敢えず着替えて、ね?その後一夏くんをよんで話しましょ?」

「あ、ああ。分かった。すぐに着替える」

箒ちゃんは顔を真っ赤にして着替えに行こうとした。よし、追い打ちをかけてしんぜよ。

「篝ちゃん。．．．顔真っ赤」

「！？ゆ、祐希い！」

「はいはい、今出ますよー」

やっぱり篝ちゃんは可愛い と思いつつながらアタシは部屋を出て、なぜか正座している一夏くん近づいた。

「．．．取り敢えず止めてきたよ？」

「お、おお。ありがとう」

「．．．さてこの件は篝ちゃんが着替え次第話し合いになったから。それと一夏くん、アタシはもう一つ君とお話しなきゃならないんだけど？」

一夏くんは今の言葉を聞いて震え出した。

「は、はい．．．。」

「まあ、あの件はアタシも許せなかったからね。だから今回はお願い一つにしてしんぜよ〜」

ほっ、と息をつく一夏くん。だが甘いんだよねえ。

「そ、そうか、助かる。で、その内容は何なんだ？」

「決闘が終わったら、休みに遊びに行こうよ？いや、アタシ女の子

だからいわゆるデート？」

一夏くんは一瞬固まり、そして理解した瞬間・・・

「・・・な、なあっ!？」

「きみは断れる立場なのかなあ？」

「うっ・・・。。い、いいぜ。分かった、約束は守る」

よしっ、ファーストフェイズ終了!アタシの策略にかかったな!

「はい、約束ね　ん?そろそろ着替え終わったかな?じゃあ入る?」

「いや、まず確認してくれないか?もう二度とゴメンだ」

「えゝ、一夏くんは女の子に興味ないのかあゝ」

「アアアアアア!だから違っって!」

「冗談よ、冗談!合図したら入って来てね?」

「ったく、分かったよ」

何かとこの二人弄りやすいし面白すぎっ!そう考えながらドアを開ける。

「ほーおーきっ!終わったゝ?」

「あ、ああ。入っていいぞ」

「だってさ」

「お、おお」

さてさて着替え終わったところで三人揃ってベッドに腰掛け、アタシは事情を聞くことにした。途中喧嘩になりそうだったから仲裁をし、そしてこんな惨事にならないようある程度の線引きを決めた。

「．．．というわけで今回の件はもう終わりね。周りにも迷惑がかかるからしないよーに。分かった？」

「あ、ああ。分かった。善処する」

「おう、約束する」

二人とも仲いいのはいいけど喧嘩はしちゃいけないよ．．．と付け加えた瞬間、篝ちゃんは赤くなった。やっぱり可愛い一夏くんは篝ちゃんが赤くなったのを見て風邪でも引いたのかとも思ってるのかなあ。相変わらずの朴念仁、いや朴念『神』だね。

「それと、次こんな騒ぎがあったら．．．．．どうなるか分かるよね？」

二人は修羅を見たかのように青ざめて震え出した。

「「ぜ、善処いたします」」

お？ナイスコンビネーションだね！

「よろしい！それと一夏くん、明日から放課後は箒ちゃんに剣道の指導を受けて」

「え、なんで？」

「なんでって、一夏くん中学ん時部活してなかったでしょ？バイトしてて。感鈍ってるだろうからね」

「あ、ああなるほど。ってなんでバイトしてたこと知ってたんだよ！？」

「ん？独自の情報網だよ」

はあく、とため息をついた一夏くん。その隙を見てアタシは箒ちゃんに近づき小さな声で言った。

「（良かったね、一夏くと『二人きり』の時間ができて」

聞いた瞬間赤くなる箒ちゃん。箒ちゃんが一夏くんを好きなのは初めて会った時から知っている。

「（・・・な、なっ！？）」

「（頑張ってるね？ちゃんと教えられたらご褒美あげるから）」

「（うっ。。。あ、ああ。頑張る）」

よし、セカンドフェイス突破！これでよしっ、っと。

「なあ、祐希。ISについてはどうするんだ？」

そうだった、篝ちゃんが剣道の指導するから放課後は無理か。しかしアタシは既に考えてるのだった！

「ん？それはね考えているよ。夕食終わったらアタシの部屋に来てくれれば基礎知識教えるから」

「そうか、分かった」

「分かってくれればいいですよっ、じゃあアタシは帰るね。」

「おう、じゃあな。また後で」

「ああ、色々とありがとな、祐希」

取り敢えず戻らないと。来てるかもしれないし。

十一話 入学初日 part 3 (後書き)

まだ初日は続きます。多分次で終わるだろうけど・・・。

多分簪の機体が変わります。大体の構成は変わりませんが。

感想をお願いします。

十二話 入学初日 part 4 (前書き)

眠いです。冬休みになったら大量投稿ができるので、新作を書くかもしれません。もちろん並行ですが。

ではござい！

十二話 入学初日 part 4

祐希 side

ついつい長く話してしまった．．．。よし、あの二人には夕食を奢ってもらおうとしよう。急がないと『あの子』を待たせてるかもしれない。

話が終わったアタシは急いで部屋を出る。そして隣の部屋に戻ろうとした。するとドアの前に制服で青の髪をした子がいた。

「あつ、待ってた？簪さん？」

ドアの前に立っていたのは4組の楯無簪たてなしかんざしさん。一応日本の代表候補生なんだけど．．．専用機がないという異常事態。

「い、いや．．．今来たばかりだけど．．．」

多分感情表現が苦手なんだろうと思った。こういう時はあまり追求しない方がいい。

「そう．．．、じゃあ入って。お茶でもご馳走するから、ね？」

「．．．う、うん」

そう言ってアタシたちは部屋に入った。簪さんは椅子に座って待ってもらったことにした。その間、アタシは日本茶を用意した。

用意が出来たので湯のみを持っていき渡した。

「はい、日本茶。熱いからね」

「あ、ありがと．．．」

アタシは一口飲んだ。うん、やっぱり日本茶は落ち着く。さてさて、本題に入るのかな？

「ではでは、早速。質問したいんだけど、いいかなあ？」

「．．．な、何？」

「いや、なんでね、一夏くんを監視していたのかなあと思ってね」

「そ、それは．．．」

「『白式』が開発されることになったからかな？」

「!?!?．．．．．う、うん」

やっぱり。一夏くんがISを動かせる様になって、データ収集のために一夏くんの専用機の開発が行われた。しかもその開発が倉持技研が担当になっていた。アタシは倉持技研の研究者だからそのことは知っていた。しかしさつき調べた様に打鉄式は倉持技研が開発元になっている。．．．つまり白式の開発が優先になって打鉄式の開発が後回しになり、中断されてしまったのだらうとアタシは考えた。

「でも、なんで一夏くんを監視してたの？」

「そ、それは．．．．．あ、あの人はっ．．．ISを手に入れることが出来たけど．．．そ、それで私のISは．．．ないからそのことをっ．．．」

言いたいことが分かった。一夏くんには自分はISを手に入れることが出来るけど、そのせいで他の人に．．．いや簪さんに迷惑がかかることを知ってもらいたいのだろうと理解した。

「．．．それと、あの人がちゃんと大事に使ってくれる人なのか．．．見極めたかったの．．．」

そうか、簪さんはISがどんなに大切なものかを知っている。だから、横暴に使わないか心配してたのかあ．．．．．いい人だね。

「ん、分かった。でも、安心して。一夏くんはそんな人じゃないから」

「ほ、本当に．．．?」

「うん、約束する。だってあんなに友達を大切に人がISを乱暴に使うと思うっ?」

「．．．そ、そうだね」

「それと今度一夏に会おっか?知ってもらわないと、ね?」

「．．．．．うんっ」

「そっいえば、更識さんのISって．．．ああもう、なんか嫌だな」

「えっ？．．．な、何が？」

「アタシはね、友達って思った人を名前で読んてるの。だからあんまり苗字で呼ぶことに慣れてないんだ」

「わ、私も．．．そ、その友達．．．なの？」

「うん。だってあんなに自分のこと話してくれたたでしょ？ちゃんとアタシを頼ってくれたんだもの」

「．．．うん。あ、ありがとう．．．。そ、その、呼び方、簪．．．でいいよ．．．?」

「うん！分かった、簪ちゃん。じゃあアタシも祐希でいいよ」

「う、うん、分かった．．．ゆ、祐希」

「それで戻るけどね、簪ちゃんってISどうしてるの？」

「．．．今、自力で組み立ててるの．．．」

「えっ、それって．．．」

普通じゃありえない。ISは企業の中でチームを作り制作していく。ISはとても複雑だからだ。しかしアタシと束さんは二人で、束さんは一人でもできるけど．．．。それを一人で．．．?」

「で、でも六割以上は作られていたから．．．。だいたいの装甲とかは．．．」

「でも待つて。それでも大変な量でしょ？なんで整備課の人とかに頼らないの？」

「そ、それは・・・。」

何かあるんだろうと思った。アタシは話してくれるのを信じて待つことにした。

「わ、私の姉さん・・・更識むらじき楯無たてなしつて、し、知ってる・・・？」

「うん、知ってるよ、でもなんで？」

そう、私が世界の裏情報を調べてたとき、更識家のことを知った。楯無さんは『裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の当主であり、17代目の楯無』らしい。多分、本当の名前があるのだろう。

「・・・ね、姉さんに追いつきたかったから・・・これ位出来ないと・・・姉さんの影さえも踏めない・・・」

「まって、これ位って・・・まさか楯無さんって!？」

「う、うん。途中から作り上げたの・・・」

「さすがだよ、楯無さん・・・。」

「でも、それじゃあ何ヶ月もかかるんじゃない？」

「!?. . . うん、うん」

そうか、でもそれは余りにも負担が大きすぎる . . . 。 OSとかになると膨大な量だよ . . . 。 よしっ、決めた。

「簪ちゃん、私に手伝わせて?」

「えっ!?! な、なんで、 . . . その、手伝ってくれるの?」

「友達だから。それにアタシは困ってる人を放っておけないのです。」

簪ちゃんは涙を流していた。それは悲しみじゃない。喜び。

「うん、うん。 あ、ありがとう . . . !」

アタシは簪ちゃんをそっと抱きしめた。やっと解放されたんだろう、一人の重みに . . . 。

それから数分後簪ちゃんは泣き止んだ。アタシはそっと放した。

「じゃあ、簪ちゃん。 ISのことについて話そっか?」

「うん、分かった」

「その前に簪ちゃんは射撃と格闘、どっちがやりやすい?」

「・・・し、射撃かな？」

「ふむふむ、それと簪ちゃんは戦術とか、頭脳戦とかは得意？」

「う、うん。それなりには・・・」

これができるればビット兵器とかが使いやすくなる。

「なるほどね～。・・・じゃあ、中距離から遠距離かなあ。じゃあさ、機密に触れない程度にスペックデータ見せてくれる？」

簪ちゃんはアタシの顔つきが研究者になった事に気づいたのか、

「う、うん。ちょっと待ってて」

数秒後、ディスプレイが表示された。

「あちゃー、これはバランスが悪いね～。簪ちゃんの特性を生かすためには改良か、・・・一から作るか」

「!?!?・・・一から作るの・・・?で、でもっ、製造権は倉持技研だよ・・・?」

「大丈夫、これでもアタシ、倉持技研の研究者登録されてるから」

今の一言に簪ちゃんは驚愕の顔を浮かべた。だって前にいるのは自分と同じ高校生なのだから。

アタシは倉持技研に連絡した。

『もしもし。倉持技研ですが』

「こんにちはっ、久遠です。水城さんいますか？」

『あら、久遠さん。分かったわ、少し待っててね』

「はい」

数秒後・・・

『はいっ、みんなのアイドルっ、奈々さんですよー！』

「奈々さんこんにちはっ！お久しぶりです！」

『久しぶりねえ。で、要件はなに？』

「あのですね、打鉄式式の製造権あるんですよね？」

『うん、あるわよ。・・・祐希ちゃんが作るの？』

「さっすが奈々さん！話が分かりますねっ！正確には二人で作るんですけどね」

『へえ〜、誰とつくるの？』

「・・・その操縦者の更識簪さんです」

『!?!?・・・あの子には本当に悪いことをしたわ。うん、それならいいわよ、承認します』

「ありがとうございます！それと、もしかしたら一から作り直すかもしれませんけど・・・」

『本当に！？祐希ちゃんのが作ったIS見てみたいと思ったのよねえ。いいけど、完成したら見せてね。それが条件ね』

「はいっ、ありがとうございます！それと後日、『S1ドライブ』を送って下さい。アタシが作った予備が二基あるはずですから」

『いいわよ、任せなさい。必ず送り届けるから。じゃあ、また後日連絡するわ』

「ではでは、失礼します。・・・ふっ、これで全てが整った」

「ね、ねえ。ほ、本当にいいの・・・？」

「まっかせなさい！簪ちゃんを飛ばせてあげるから、ね？」

「・・・本当にありがとう」

「いいよ、友達だから。じゃあ打ち合わせは来週からでいい？色々準備するから」

気が付けば時刻は7時。夕飯時だ。それに来週は決闘だし。あと、千冬さんにも事情説明や整備室の使用許可も貰わないといけないし。

「うん。・・・じゃあ、またね」

「じゃあねっ」

バタンツ!

さてさて、夕食にしますかっ。一夏くと篝ちゃん待ってるだろうから。それに奢ってもらおう。

夕食を終え自室に戻った。「奢って」と二人に頼むと一夏くんが

「いや、今回は俺が悪かったんだ。俺が二人分奢ってやる」

と言った。太っ腹だねえ一夏くん。だから私は一番高いスペシャルディナーを奢ってもらった。一夏くんは落胆していたが・・・詰めが甘いね

篝ちゃんはその発言にときめいたのか、顔が赤くなっていた。やっぱり可愛いねえ!

ま、こんな感じで夕食を終えたアタシはお風呂に入って、ベッドに横たわった。

「ねえ、スマレ?」

『なあに? 設計なら順調だよっ!』

「気が利くねえ〜。じゃ、ちょっとアタシの意見も入れて考えよ?」

『りよーかいですっ!』

その夜はアタシとスミレによる簪ちゃん専用機的设计を始めた。

十二話 入学初日 part 4 (後書き)

やっと、初日が終わった。

簪と楯無さんの和解は必ずしたいです。

次回は楯無さんが出てくると思います。

では、感想をお願いします。

十三話 完璧超人の想い（前書き）

週末も終わってしまっう・・・

ちなみに自分は暗いのは嫌いなんで・・・明るいところが多くなる
と思います

必要なところは書きますけど、暗いより明るいほうがいいと思いませ
ん？

では、どうぞ！

十三話 完璧超人の想い

一夏side

一夜明けて俺と箒と祐希は朝食を寮の食堂で摂っている。三人揃って和食セットを注文した。なにより鮭が美味かった。絶妙な塩加減でご飯との相性はバツチリだ。今度食堂のおばちゃんに教えてもらおうと思う。それにしても……

「箒、この鮭うまいな！」

と言ってみるが、

「……………」

この通り昨夜から無言の返答しか帰ってこない。……俺、何か怒らせたか？というかまだ怒ってるのか？

「なあ、箒。なんでそんな怒った顔してんだ？」

「……………生まれつきだ」

やっと帰ってきた返答がこれかよ……。しかも

「ブツ!!」

祐希は吐き出すし。

「おわっ!?!おいつ、味噌汁吐くなよ……」

「う、ごめん……。でも、可笑しくてさあ、ア、アハハハ！」
確かに筈の返答は可笑しかったけど……。はあああ……。

「おい、いつまで食べている！食事は迅速に効率良く取れ！遅刻したらグラウンド10周させるぞ！」

おまけに寮長が千冬姉とは……。心配した俺が馬鹿じゃないか……。

祐希 side

休み時間が終わり、千冬さん担当の授業が始まったのだが……

「織斑、専用機の準備は時間がかかるそうだ。だから基礎知識は叩きこんでおけ、いいな？」

白式かぁ……。あれは途中から東さんが独占して作業していたなあ。

『祐希ちゃん、これは私が仕上げるからSLドライブをよろしくねっ！……さあて、私色に染め上げるぞおお！』

などとも言っていたなあ。どんな機体になっているのかなあ？楽しみだね、うん。私色に……ってたのが気になるけど。

そうこう考えているとクラスの話題は束さんと篝ちゃんの関係になつてた。

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」
といった声も出てきてる。いけないっ、篝ちゃんから我慢の限界の心配が。．．．よし！

「待つて待つて、みんなさあ篝ちゃんも篠ノ之博士の妹なだけだよ？みんな自分がこんなふうには追求されたらどう思うの？」

クラス内に沈黙が漂う。よし、何とか静まった．．．。

「そ、そうだよね．．．。ゴメンね篠ノ之さん！」

「つついつい考えずに言っちゃってホントごめんっ！」

クラスで質問攻撃をしていたほとんどの人が謝り、頭を下げていた。

「え、あ、ああ。分かってくれればいいんだ。だからそんなに頭を下げてくれて．．．」

「「「ありがとっ、篠ノ之さんっ！」「」」

質問攻撃があつた授業後の休み時間、私は祐希の所へ行つた。お礼を言つたために……

「ゆ、祐希。さっきはその、あ、ありがとう」

「ううん、気にしないで。それより良かったね」

「ん？なんのことだ？」

「クラスみんなが物わかりが良くてね。じゃなきゃ、アタシの意見なんて聞かなかつたと思うよ」

「あつ……。。」

そうだな、あそこで聞かなかつたら当然質問にあつて私は怒つていただろう。たぶんそれで私がクラス内で孤立するのを察してのことだったのかもしれない。……クラスの人もだが祐希には感謝しなければいけない。

「それでもだ、本当にありがとう、祐希」

「う、ううん。いいのいいの、篝ちゃんがよければね！それと今日から特訓でしょ？……強くしてやってね？」

「ああ、任せろ。強くさせてみせる、きつと」

私は軽く拳を作り、それは祐希もしていて、私たちは友情の証としてコッソとぶつけた。

祐希 side

今日一日の授業が終わり、特に何もすることのなかったアタシは寮の部屋に戻ることにした。帰る前に篝ちゃんに手伝ってくれないかと頼まれたが、『二人きり』の時間を潰したくはなかったので用事があると言い、断った。

織斑先生に篝ちゃんの機体のことを話すと言う選択肢もあったけど、まだ後でもいいですよ。

とりあえず、そここう考えている内に自室の前に到着！ああ、やっと休めると思つて鍵を開けドアを開けた。

ガチャッ！

「あ、お邪魔してまーす」

バタンッ！

うん、部屋でも間違えたかなあ？いやいや、自分の部屋だよね！？誰も居ないはずだよね！？

ガチャッ！

「急に閉めないでよ、おねーさんがっかり！」

私はすぐさま反応し、

ケータイを開く。

織斑先生の番号を表示。

ボタンを押す。

しかし、中にいた女性がケータイを止める。そして言った。

「ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ！！お願いだから通報しないでっ！！」

涙目になりながら懇願してきたよ．．．うっ、なんか可哀相に思ってきた。

「わかりましたから、取り敢えず中に入りましょう？」

「えっ、いいの？やった」

ああ、ミスっちゃった。この人は油断できない．．．、はああっ。まあ、中に入って話でも聞こう。ちょうどいい、アタシも聞きたいことあったしね。

アタシはその女性を．．．名前は分かるのだが自己紹介するだろうからいいでしょ。椅子に座ってもらって、お茶の準備をした。今日は紅茶だ。ん？なぜ誰か来たらお茶なのかって？それはアタシが大好きだからさっ！おっと、できたできた。

「はいっ、どうぞ」

「あつ、ありがとねー」

アタシたちは少しお茶を飲み、話を始めることにした。

「それで、アタシに何の用ですか？」

「その前に自己紹介をするわ。私は更識さらしき楯無たてなし、生徒会長よ。以後よろしくね？・・・倉持技研研究者の久遠祐希さん？」

やっぱりアタシの素性を知ってましたか、さすがは

「よくご存知ですね、会長さん。いや、『更識家十七代目当主の楯無』さん？」

「あら、私の情報もよく知ってるわね。裏なのに」

楯無さんはクスリと微笑みながら扇子をどこからともなく出して広げた。・・・そこには『あっぱれ』の四文字。思わず吹き出しそうになった。

「それで、おねーさんのことは楯無って呼んでいいわよ」

「はい、分かりました楯無さん。アタシも下の名前で呼んでもらって構いませんよ」

「分かったわ、では祐希ちゃん。今回は生徒会長としてお願いがあるのよ」

「何ですか？」

微妙にさつきから嫌な予感がするのは気のせいかな？

「それはね．．．我が生徒会の役員になって欲しいのだけど」

やっぱりそうかあ．．．。

「お断りします」

「即効お断り！？おねーさんは悲しいよ．．．」

オヨヨ、とハンカチを出して目元を拭く。しかしアタシは、

「嘘泣きしないで下さいよ楯無さん．．．」

「あら、バレちゃった」

はあっ、この人は．．．。

「でもなんでアタシなんですか？」

「ん〜？それはね〜、祐希ちゃんがどこの部活にも入らなさそうだから」

「ええっ？ここってどこかの部活に入らなきゃいけないんですか？」

それは初耳だよ。てっきり入らなくてもいいと思ってた。

「そうなのよ、だからね生徒会に入ってもらおうと思ったってわけなのよ」

って、広げた扇子に『強制』って書いてある……。つまり何か入らないといけないんだろうなあ。

「それにね？生徒会って言っても常に仕事があるわけじゃないから。それに入ってくれると本音ちゃんが喜ぶわ、きっと」

本音ちゃんも入ってたのか。……って仕事できるのかなあ。うーん、ほかの部活に入ろうとも思わないし、……よし、決めた。

「じゃあ、他に入りたい部活もないんで。生徒会に入らせてもらいます」

「お、入ってくれるの？やった おねーさん嬉しいわ」

またまた広げた扇子には『感激』の2文字。どうやったら出来るのかなあ？ま、それはいいとしてアタシも質問しよう。

「じゃあ、アタシからも一ついいですか？」

「なあに？」

「簪ちゃんについてです」

「あら。その口調だと簪ちゃんとお友達なのかな？」

やっぱりちよっと元気が無くなった……。。

「はい、昨日知り合いました」

「で、何か言ってた？私について」

「はい、その中で簪ちゃん言っただんですけど。楯無さんって途中から自力で作ったんですか？自分の専用機を」

「あ、やっぱりそのことか。実際のところはね本音ちゃんのお姉さんで3年の虚（まじ）さんと同級生の黛（まゆずみ）薫子ちゃんに手伝ってもらったのよ。ちなみに虚さんは主席、薫子ちゃんは2年のエースね」

なるほどねえ、それなら納得とアタシは縦に首を振った。

「それで簪ちゃんは私を見て一人で組み上げようとしてたんでしょ？」

「．．．知ってたんですか？」

「まあ、ね。伊達にお姉さんやってないわよ」

やっぱり楯無さんも知ってたのか．．．よし、聞いてみよう。

「楯無さんはどう思ってるんですか、．．．簪ちゃんのこと」

「．．．ただあの子を守ってあげただけだよ」

「守る？」

「そう、ただただ簪ちゃんを守ろうと思った努力したの。私はいつの間にか天才って呼ばれる様になって、そしたらいつの間にかあの子が私に引け目を感じてたってトコかな。たぶん私みたいになろうとしてたんだと思うの。．．．あの子はあの子でいいのにね」

．．．これは、篠ノ之姉妹と同じだなあと思った。色々策を講じる姉、反発する妹。分かりあえてないだけで、きっと分かり合えるはずだよ、きっと。

「楯無さんは．．．昔からその思いなんですよね？」

「うん、変わらないわ、昔も、今も．．．ね」

「じゃあ、そのまま自分の思いをぶつけなければいいじゃないですか」

「え．．．？」

楯無さんは少し驚いてる様子だった。

「変わらないんでしょう？昔も、今も。分かり合えるはずですよ、きっと」

「．．．．．そうね、でもそれはあの子の機体が完成したらいいわ。そしたら私の想いを必ず伝えるわ」

「そうですか．．．それとですね、簪ちゃんの機体は私も手伝って一から作り直すことにしました」

楯無さんは目を見開いていた。それもそうだ、一から作るなんて。でも、楯無さんは

「フフツ、あなたたちなら出来るわ、きっと．．．簪ちゃんをよろしくね、祐希ちゃん」

「はいっ、楯無さんも約束守って下さいよ？」

「わかってるわ、色々ありがとね。．．．それと生徒会の件、手続きはしておくわ。今度の会議のとき本音ちゃんと一緒に来たらいいわ」

「はい、分かりました。じゃあ、ありがとうございました」

「いいえ、お礼を言うのはこっちのほうがよ。じゃ、またねっ」

ボタンツ。

『大丈夫かな、簪ちゃんと楯無さん』

スマレも聞いていて、心配してくれてたみたいだ。

「きつと大丈夫よ、きつと。．．．ね？」

『うん！ 私たちも頑張る？』

「そうね、最高の贈り物をしてあげよっか！」

アタシは信じている。あの姉妹が分かり合える日々を．．．。

十三話 完璧超人の想い（後書き）

少し遅くなりました。

釋廉慎のを少し引用しました。

次は多分決闘です。

ではでは感想よろしくお願いします。

十四話 白い侍と青い零 part 1 (前書き)

平均睡眠時間が短くなりつつあるこの頃です。
なぜだろうつ？

今回の一夏は冴えています。

では、よいしょ！

十四話 白い侍と青い零 part 1

祐希 side

決闘の決定から一週間。ついにこの日がやってきた。今日は一夏くんとセシリアさんとの試合なんだけど……………

「よりによって自室待機ってどうなの？」

授業が終わり、アリーナへ行こうと思った矢先……織斑先生がアタシを引き止めた。

「お前が試合を見てしまったらオルコットが不利だろう。よってお前は自室待機だ」

はあ、やっぱりこうなるか。でも一夏くんの専用機調整してあげたかったなあ、ホント。

『しょうがないよユウキ、でも織斑君にはできるだけだけの知識を教えただんでしょ？だったら大丈夫だよ、きつとね』

「……………うん、そうだねスミレ」

確かにアタシは一夏くんにできるだけの基礎知識を叩き込ませた。また、剣道の方も箒ちゃんの指導によって昔の感覚を取り戻しつつあるらしい。さっすが箒ちゃん！恋する乙女のパワーは違うねっ！

「それにしても勝てるかなあ？なんかコロっといきそうなんだよねっ」

『なんでそう思っの?』

「ん? だって一夏さんとセシリアさんは経験量が違うじゃない。しかも代表候補生だしね。 . . . 正直に言えば勝つのは難しいね。」

『それでも . . . それでも織斑くんは食らいつくよ、きっとね』

「まあ、今は祈るしかない」

一夏 side

俺は今、決闘を控えてピットにいる。そして俺の専用機がくるのを待っているところだ。結局一回も実践練習ができずに今日を迎えてしまった。しかし、箒による剣道の稽古や祐希のISについての特別講義である程度はよくなったと思う。

「一夏、油断するなよ。相手は代表候補生だからな?」

「わかってるさ、箒。 . . . 俺も今日まで頑張ってきたんだ、無駄死にはしねえよ」

「ならいい」

プシュッ!

空気の音を鳴らし、自動ドアが空いた。そこから千冬姉と山田先生が入ってきた。

「織斑、準備はいいか？」

「はい、いつでも」

「ならばいい。きたぞ、お前の専用機」

そう言った瞬間、重い音が鳴り、ピット搬入口が開いた。完全に開いたあと、ゆっくりと中からでてきた。

そこに『白』がいた。

「これが・・・」

「はい！織斑君の専用機、・・・『白式』ですっ！」

出てきたと同時に山田先生がそのISの名称を言ってくれた。・・・白式か。

「織斑、アリーナの使用時間は限られている。フォーマットとフィッティングは実践でやれ」

うわっ、鬼だ。普通はそれをしてから戦うのだが・・・。しかし祐希からあらかじめその場合も想定して戦術も組み立てた。備えあれば憂いなしってやつだ。・・・きつといけるさ。

「背中をあずけるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

千冬姉の言葉通り、白式に身を任せた。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺の体にあわせて装甲が閉じた。解像度を一気に上げたかのようなクリアーな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。ハイパーセンサーは問題なく動いているようだ。

「ん？」

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り。

律儀な報告ありがとうございます。つてか射撃タイプか……。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

どうやら俺のことを名前で呼んでくれてるし、心配してくれているらしい。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

これだけで十分だ。

「第」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ．．．ああ、勝ってこい」

その言葉に首肯で答え、俺はピット・ゲートに進む。その間にも白フィッティング式は最適化処理の前の段階である初期化を行なっている。問題はこれだな。どのタイミングで終わるかが鍵になる。昨日の祐希の講義で挙げられた項目でもあった。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアさんはふふんと鼻を鳴らしていたが．．．んなことどーでもない。

鮮やかな青の機体『ブルー・ティアーズ』。フィンアーマーを4枚背に従えているのが特徴的だ。それと手には2メートルを超す長大な銃器 検索、67口径特殊レーザーライフル≪スターライトmk?≫と一致、が握られていた。

対して俺の武器は何があるんだ？そう思って展開可能な装備の一覧を出した。．．．っておい。

(近接ブレード1個．．．こりゃねーだろよ、おい)

実際に1個しかないのだ、仕方ない。というか剣道しかしてないか

らな、十分だ。

「最後のチャンスをおげますわ」

セシリアはまだ戦闘態勢に入っていない。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

．．．おいおいおいおい、先に言ったのお前だろ。警戒、敵I S操縦者の左目が射撃モードへ移行。セーフティのロック解除を確認。．．．しかも何気に戦闘態勢入ってるし。．．．はあつ。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら」

警告！ 敵I S射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

．．．やっぱりそのタイミングか。でも、お見通しなんだよ。

「お別れですわね！」

キュインッ！ やっぱり撃ってきた。

「よっど」

俺は既に分かっていたため、撃ってくる瞬間に少し右へずれ、避けた。

「なっ．．．!? 完璧に狙ったのに、なぜ!？」

動揺しているみたいだ、そりゃそうだ。初弾をよけられたのだからよし、このまま作戦通りに行こう。昨日の祐希との講義で対策を練っていた。

『いい? まず一夏くんのISは初期化のままだろうから、最初は回避に専念すること。一次移行までの間ね』
ファーストシフト

その作戦道理に動いて約30分が経った。シールドエネルギーは向こうのほうが上だがさほど差はない。回避に専念していただけあってダメージも最小限の被害で済んでいる。その攻撃手段のほとんどが自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』だった。あれは厄介だ。．．
．受けておいてよかったな、祐希の講義。ちなみに俺も隙を付いてセシリアに何度かダメージを負わせている。

「くっ．．．。ここまで耐えるとは．．．、想定外ですわっ!」

「そりゃどつとも」

しかしこのままでは埒があかない。それにこのペースなら負ける。．

．．賭けに出てみるか!

「「こちらとしましてもこれ以上は好きにさせませんわっ!」

あの遠隔操作兵器が動いた。すぐさま俺を取り囲み撃ってきた。

俺は四方から撃たれるレーザーをくぐり抜けた。

「避けた!?!でもこれでっ!」

セシリアはくぐり抜けた俺をライフルで撃とうとしていた。．．．
まずい、ここで受けたら差が開く。ならばっ!

「ぜああああっ!!!」

ガキンッ!

無理矢理な加速によって俺はセシリアのライフルにまともにぶつかった。その衝撃で砲口がそれ、直撃をまぬがれた。

「なっ．．．!?!無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ!」

そう言っつてセシリアは空いている左手を横に振る。すると、それまで周囲の空間に待機していたビットが俺に向かって動いてきた。

．．．やっぱり。流石だよ、祐希は。

『それと一夏くん。もしも相手がビット兵器を使ってきたら、その操縦者は動かないと考えていいから。ビットに意識を集中させるからね』

撃たれたレーザーをくぐり抜け、一閃。ビットがまっふたつに割れ、爆散した。これで1機撃墜。

「なんですって!？」

驚愕しているセシリアに向けて俺は上段打突の構えで・・・斬り込む!

十四話 白い侍と青い零 part 1 (後書き)

終わりが悪かったか・・・？
時間がない。

次回は後半です。

十五話 白い侍と青い零 part 2 (前書き)

冬休みに突入！

2学期の結果最悪…………。

勉強に励む！

では、どうぞぞー！

十五話 白い侍と青い零 part 2

—夏side

俺は上段打突の構えでセシリアに切り込んだ。

「くっ．．．！」

やはり代表候補生だけあって回避したか．．．。その瞬間セシリアは右手を横に振った。するとさらにビットが2機飛んできやがった。見た感じあと3機！

「おおおおっ！」

一閃。さらに一閃。ガキンツ、ガキンツと金属がぶつかる鈍い音を散らしながらさらに2機破壊した。

「何故っ！？なんで破壊できますのっ！？」

やはり相当自信を持っていたせいかな驚愕の眼差しをこっちに向け怒鳴ってきた。

「俺の予想だがっ、そのビットは命令を出している本人は動けないみたいだからな。これくらいなら行けるっ！」

凶星だったようで、ひくくっつとセシリアの右目が引きつっていた。
．．．それもつかの間、最後であろう1機をこっちに飛ばして撃ってきた。

「でもっ、1機だけならっ!!」

一閃して、最後の1機を破壊してセシリアに切りかかった。

(距離を詰めれば俺が有利だっ!)

．．．．．それがいけなかった。

「　　かかりましたわ」

ニヤリと小悪魔的な笑顔で笑っていた。

やべっ! そう思い緊急回避しようとした．．．．．が、間に合わなかった。

ウンッ。

セシリアの腰部から広がるスカート上のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あってよ!」

「くそっ! 弾道型ミサイルかよっ!」

レーザーと違って、追尾してくるわけで．．．．．よけれ
る訳がない。

「・・・っつ！」

ドカアアアンツ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は包まれた。

三人称 s i d e

ここは現在一夏とセシリアが戦闘中のアリーナのピット。そこには千冬と真耶、そして箒だけがいる。

「はあああ、すごいですねえ織斑君」

ISの起動回数が二回目の一夏が何百回も起動している代表候補生にほぼ互角で戦っているのだ。感嘆の声を上げるのも無理はない。

「ふん、やはり久遠が教えたんだろう。なあ、篠ノ之？」

「は、はい」

いきなり話を振られた箒は戸惑っている。

「しかし、アイツ。調子に乗っているな」

「え、なぜですか？」

真耶は一体どこから見れば分かるのかと思い、口にしていた。

「さつきから左手を開いたり閉じたりしているだろう。．．．あれはアイツの昔からの癖だ。ああいうときは大抵ミスをする」

「へえええ、さすが姉弟ですねえ。そんな細かいところに気づくなんて」

ささいな真耶の言動に千冬はハツとする。

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな．．．．．」

「あれえ？もしかして織斑先生照れてるんですか？」

「チツ、．．．．．」

ガシィ！

その瞬間真耶の頭にアイアンクローが炸裂した。

「お、織斑先生！ギブですっ、ギブですうっ！」

「山田くん、私はからかわれるのがとても嫌いだ」

「わ、分かり、ぐううっ．．．．．分かりましたからあああ
！」

泣きそうになりながら懇願してきた真耶を睨み、千冬はその手を放した。

「ならばいい。次は無いと思えよ、山田くん」

「は、はい」

箒は横目でその惨劇を見たあと、モニターに視線を移した。

「．．．．．（一夏．．．）」

箒がほんの少し唇を噛んだ瞬間、試合は動いた。

セシリアの腰部からミサイルが発射され、一夏に．．．．直撃した。

「い、一夏っ！！」

箒は思わず声を上げた。その視線の先、モニターには赤を超えて白の煙が上がっている。もちろん千冬と真耶も注目目の眼差しを向けている。爆発の後、最初に声を上げたのは．．．．千冬だった。

「ふん、機体に救われたな．．．いや、計算の内か、久遠の」

その瞬間爆発した場所の煙は一掃された。

一夏side

(くそっ！このままじゃ当たる！)

ミサイルが発射され追尾してくる中、待望の瞬間が訪れた。

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

(来たぜ！この瞬間を待っていた！)

その瞬間一夏はくるりと機体を反転してミサイルを……斬った。

ドカアアアンッー！

(……………っっ！シールドエネルギーがっ、でも！)

俺は即座に目の前にある確認ボタンをアイコンタクトで押した。

ここで祐希の作戦が生きてくる。

『いい？フォーマットとフィッティングが終わって確認すると、ISが自動的にIS装甲を再構成するの。そのときにそれまでに受けた実体ダメージはすべて消える。．．．でもシールドエネルギーが回復するわけではないからそこはあしからず』

つまり、形態移行する前にミサイルを受けておけば実体ダメージは無くなる。したあとに受けるよりはマシだ。．．．まあ、エネルギーは減るが。

考えている内に形態移行が終了した。これでやっと俺専用になった。すぐさま使用可能装備欄を開き武器の確認をした。

(やっぱり、ブレード一本か。ん?)

近接特化ブレード・《雪片式型》

(これって千冬姉も使ってたか？それに．．．)

ワンオフ・アビリティー《単一仕様能力》 零落白夜

さらにその能力名の下に備考欄があったからそれを開いてみた。

零落白夜．．．バリア無効化攻撃。自機のシールドエネルギーを転用し、雪片式型にエネルギー刃を生成。また．．．．

（．．．．．全く、俺は凄い姉さんを持ったもんだよ。それじゃ行きますか．．．．．白式っ！！）

俺は未だに周囲にある白い煙を雪片式型で払い．．．セシリアに向かってスラスタ全開で突っ込んだ。

「うおおおおお！！！」

現最大速度でセシリアに近づき一閃、そして離脱。いわゆるヒットアンドアウェイだ。

「．．．．．！？ま、まさか一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定の機体で戦っていたと言っの！？」

ダメージを受けたセシリアは振り返りながら叫んだ。

「ああ、時間がなかったんでな。さてと、この刀は千冬姉の後継なんだ！絶対に負けるわけにはいかねえ！」

千冬姉がどんな反応しているかは俺にはわからねえ。だけど、．．．
だけどっ！！

「この一撃で決めるっ！！！」

俺は雪片式型を両手で持ち、真正面に構えた。幸い、序盤で回避に

専念していたからエネルギーは1回分はある。何の1回分なのか、
．．．決まっている。白式は俺の声に反応した。

《零落白夜》を発動。エネルギー転換率．．．100%。

その瞬間刀身にエネルギー刃が生成された。そして同時に再び切り込むために背部に新設されたスラスタから大量の白い光が溢れ出した。

「お前は男を見下した。世の中が女尊男卑だったとしてもプライドをスタスタにする発言をしたんだっ！！セシリア・オルコット、おまえは！！！」

「う．．．．．」

セシリアは俺の気迫に押されたのか、怯んでいる。

「男をつ、なめるなあああ！！！」

最大出力で近づき、そして．．．．．

「おおおおっ、．．．らあっ！！！」

すれ違いざまに一閃。そして離脱。数10メートル離れた場所で停止し、刀を片手で右におろした瞬間．．．．．勝負は決まった。

「試合終了。ブルー・ティアーズ、シールドエネルギー・エンブレ
イ！。勝者．．．織斑一夏」

そのアナウンスが流れた後、アリーナはフィールド、観客席、ビツト問わずに静まった。

そしてそのアナウンスの後、最初に声を挙げたのは・・・俺だった。雲ひとつない青空に向かって。

「うおおおおおおっ!!」

その声はアリーナ全てに伝わった。

十五話 白い侍と青い零 part 2 (後書き)

一夏を勝たせた。

理由、男を馬鹿にされたから。

先週末から色々あつて書けませんでした。すみません。

次回もおたのしみに。

ではでは。

十六話 勝利報告と・・・(前書き)

ねーむい。

でも書く。

なんか起きねーかな、なんか。

ではどっぞぞー！

十六話 勝利報告と・・・

祐希 side

「そろそろ終わったんじゃないかなあ？」

時刻は5時半過ぎ。今日は6時間の日だったから早く終わるはずだ。

コンコンッ。

ドアをノックする音が聞こえた。多分一夏くんだろう。そう思ってドアへ向かった。

「はい、誰？」

ガチャ。ドアを開けながら聞いてみた。

「俺だ、それと・・・」

「私もいる」

「おお、一夏くんに箒ちゃんではありませんか。入って入って！」

「お邪魔します」

「お邪魔します」

早速恒例のお茶の用意が始まった、今回は緑茶です。一夏くと薯
ちゃんは空いている椅子とベットで待ってもらっている。

はい、お茶ができました。手際よくお盆に乗せて運ぶ。

「どーぞっ、熱いからね」

「おっ、サンキュー」

「ありがとな、祐希」

「いえいえ」

アタシは一口お茶を飲むことにした。．．．うん、久しぶりの緑茶
だったけど美味しい。

「それでっ、どうだった一夏くん？」

「勝ったぜ！最初は危なかったけどな」

一夏くんは右手を突き出してサムズアップした。アタシも同じよう
に答える。

「ああ、途中で形態移行もしたしな」

「おお、すごいじゃないですか一夏くん」

「それにな、祐希が考えた作戦プラン。．．．そのままそっくりの
展開だったぞ」

「ホント？じゃあ、セシリアさんビット使ってきたの！？」

「ああ、しかも全て破壊してたぞ、一夏」

「ヒヤ、なんてやつだよ一夏くんは。2回目の起動でビット全て破壊する？普通。」

「でもなんでセシリアがビット使ってくるって予想できたんだ？」

「ああ、それ？ いや、前にイギリスにハッキング仕掛けたことがあってですね」

「……………」

「……おいおい、それは違法だぞ。祐希」

「一夏くんは呆然としていて、篝ちゃんが落胆するように言ってきました。」

「まあ、いいじゃん。私の趣味なもんで。……でね、たまたまいギリスがビットの開発を推し進めていたのを知ったの。さすがに専用機についてのデータは調べられなかったけど」

「なるほど、だから祐希はわかったのか。セシリアはイギリス代表候補生だからなあ」

「そゆこと」

まあ、実際は知ってたんだけどね。専用機の情報も。ハッキングは

束さんがしてたから興味あったし。それに教えてくれたし。今ではプロテクトかかってても5分あればヨユーだね。

「ああ、それと祐希」

「なーにー？」

「織斑先生に許可もらって写真を貰ったぞ。オルコットの流石に無理だったが、一夏の1次形態のは貰えたぞ。ほら、これだ」

「おお、ありがとありがと……」

写真を見た瞬間、アタシは文字通り固まった。

「どうした祐希、何か俺の悪いところでもあったか？」

その写真は一夏くんが刀を真正面両手で持っていて、まさに突撃前の写真だった。だが問題はそこではなく背部から出ている粒子だった。

「ま、まさか……い、一夏くんっ！白式貸してっ！」

「え、ああ。分かった。ってなんで機体名知ってたんだよ」

一夏くんは待機状態だった白いガンレット……白式を腕から外し、渡しなから言った。

「一夏、祐希は倉持技研の研究者じゃないか」

「ん？あ、そーだった。凄いな祐希、前から思ってたけど」

「お褒めに預かり光栄です！」

アタシは軽く敬礼をし、近くの棚から一本のコードを取り出し白式に・・・刺した。

「え、どーすんだそれ。反対側は小型端末か、何すんだ？」

「白式のスペックデータを出すの」

そう言っている間にパスワードやなんやら入力していく。

「それってできるのか？国家機密だぞ？」

篝ちゃんは尋ねてきた。

「ん〜？東さんのパスは知ってるからね〜」

「・・・姉さんか」

「あっ、ごめん」

「いい、気にするな。それより終わったよつだな」

アタシはパスワードを入力し終え、真っ先に目的の場所を開いた。
・
・
・動力部分。

「やっぱり・・・SLドライブ積んでる」

「え、なんだ。そのSLドライブって」

アタシは一夏くんの疑問をおいといて・・・

「おいとくなよっ」

なぜ分かったの！？まあいいや。

「篝ちゃん、机の上のケータイ、取って投げて！」

「あ、ああ」

指示通り篝ちゃんは取って私に向かって投げた。

「ありがとうっ」

とった瞬間ものすごい速さで、開いて、電話帳を開き、目的の人物の欄を開き、電話した。

・・・・・・・・ここまで5秒。

「早っ。っておい。誰にかけてんだ？」

「ん？？東さん」

「「・・・・・・・・はい！？」」

「なぜ姉さんのを・・・」

「知ってるんだよ・・・」

そんな二人は置いとき・・・アタシは通話を外部音声に設定し、ベツトに置いた。

ちなみにこの部屋は防音に優れている。これはこの寮のすべての部屋に共通。盗聴器？それは初日に全部見つけて破壊しました。破壊する前におどしたけどね。こんな感じで。

『しらないよ、国際IS委員会や他国に通告しても』

毎日盗聴器のチェックも欠かしてません。おっと、繋がったみたい。

三人称side

どことなく地上に存在している研究所に彼女はいた。

「ん、暇、暇あ」

今高速でキーボードをタッチしてプログラミングをしてるんだけどその対象のコードネームは紅。一見誰にもわからない。でも分かる人はわかる。そうこうしていると・・・ケータイがなった。

タンタンタンタン、タタタタタタタン　タンタンタタン、
タターターター

『そんな世界は傲慢だよ・・・。』で有名な某ロボットア二

メのFINAL PLUSでのOPが流れた。ちなみにその主人公たちは瞳の奥で種が割れたりする。

「そ、その着信音はあ！とっつ！」

机の上のもの何のその。豪快に撒き散らしながらケータイを取る。

「もすもすひねもす〜？はい、みんなのアイドル・篠ノ之束だよ〜！」

その声を聞いた3人はため息をつきながら

「・・・姉さん」

「これはねーだろ、いつもそうなのか祐希？」

「ん、まーねえ」

『むむつ、篝ちゃんにいつくんではないか〜。久しいね〜、元気〜？』

「は、はあ」

「まー、それなりにつてとこかな」

『うんうん、私は元気な声が聞けて満足〜。それでっゆーちゃん。何か用かな、白式かな？』

「話が分かってるんですね。じゃあ、なんでSLDドライブ載っけたんですか？」

これだ、なぜSレドライブを載せたのか。

『ん、面白そうだったからさ!』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・祐希、電話切ろうか？」

「うん、篝ちゃん。おねg』待つて待つて〜!』・・・・で本当の理由は？」

『それについては今そっちの端末にデータを送信するから起動してっ!』

言われたとおり起動させると、束さんからc a ーが来ていた。それを開くと空中投影された。そこには白式のスペックデータが表示された。

『まず載つけた理由はね、機体推進力の向上、それと零落白夜の補助の為なんだ』

話しているうちにウィンドウが開いたり、マーキングされたりしていた。

「『零落白夜の補助?』」

『うんうん、でねー。最近分かったんだけど、Sレ粒子はシールドエネルギーに酷似してるんだよね』

「うーん、分かった。つまり酷似しているなら零落白夜に転化可能
.....」

『そゆこと』

「ま、待ってくれ東さん！それだと何回でも発動可能になるんじゃないのか！？それに今日の試合ではものすごくシールドエネルギーが減ったぞ!？」

「ああ、ものすごく減っていたな」

事実、試合後残量を確認すると2桁台だった。

『そう思ったんだけどね、零落白夜はシールドエネルギーを最低でも10%は消費しなくちゃならないんだ。酷似していても全部代わりにはならないんだよ。それと今日エネルギーがたくさん減ったのはリミッターかけてるからさっ！じゃないとチートだもん。リミッター解除コードはちーちゃんが知ってるからね。ちなみにリミッターは10%毎に設定可能だよ!!』

画面にはリミッターをかけた状態でシールドエネルギーとSL粒子の割合が8:2となっていた。

「そ、そうだったのか」

『ちなみに推進力にはリミッターかけてないからね。ゆーちゃんと同じだねっ、やったぜ。ブイブイ!』

画面は推進力部分に切り替わっている。つまり、イクニッションブースト瞬時加速し放題というバーゲンセールなのだ。最大速度は・・・アタシより少し下く

らいかな。

ちなみに白董は高速近接万能型。高機動タイプだから機動力においては世界中のISに負けないのだ！・・・と束さんが言っていた。

「分かりました。わざわざ作業の邪魔してしまつて」

『いやいや、邪魔だなんてとんでもない。篝ちゃんにゆーちゃん、いっくんにちーちゃんのためならいつでもどこでも24時間フルオープン、コンビニなんて目じゃないね。5060喜んで！』

「じゃあ、また」

『じゃあね〜』

プツッ。

東side

「や〜、元気な声が聞けて大満足だよ〜」

電話を終えて椅子に戻って作業を始めた。これは紅とは違うプロگرامミング。

まあ1時間たつたくらいかな、パシュツと自動ドアが開く音がした。

「東さん、夕飯の時間だよ？」

「ん〜分かったよ！ちょっと待っててシンくん！」

シンくんと呼んだ少年は入口で私を待っていた。その髪はツヤのある茶色のショートシャギー、瞳も茶色。すらっとした体型はモデルのようだった。今は黒のジーンズに青のインナー、白いパーカーを羽織っている。

「ごめんごめん、遅くなっちゃた！」

「大丈夫だよ、気にしないで。今日はパスタだよ」

「おおー、シンくんのパスタは美味しいもんね〜、早く食べよ？」

「そっだね」

私たちは席に座ってパスタを食べることにした。

「いただきます」

今日はクリームソースだった。ほうれん草が入っていて彩りもいい。

「ん〜！美味しいねっ」

「うん、今日は出来がいい。ところで東さん。もう一人の僕はどうか？」

「ん？永遠のこと？それならバッチリ！あと二日もあれば完成だよっ！」

「そう、楽しみだね」

「楽しみで何より何より！シンくんピッタシのを造るからね！」

そうして、その2日後永遠は完成した・・・。

十六話 勝利報告と・・・(後書き)

白式に載せた、Sレドライヴ。

全部で6機載せる予定です。

シンはSEEDのキラをモチーフにしました。彼の機体は乞うご期待！

十七話 天使の實力（前書き）

宿題そつちのけで書きました。

宿題やらねばと思う。

今回の文中では和利夫さんと銀夢さんのを引用しました。

ではどじごどー！

十七話 天使の実力

祐希 s i d e

昨日の試合は一夏くんの勝利で終わった。今日はアタシとセシリアさんの試合。取り敢えずこっちはブルー・ティアーズの情報知ってるから、あとは相手の戦闘スタイルだけ。まあ、射撃特化みたいだから近接は皆無だろうね。

ユウキ、今日ビット使う？

うん、どうしよっかな？

ちなみに今は放課後で、セシリアさんとは向かい側のビットにいる。もちろんここにいるのは、一夏くんと篝ちゃん、千冬さんに山田先生。まだ白董は展開してないけど。

でも、今日が初めてだよ、みんなに見せるの。

うん！でも手加減したら悪いだろうしね……。フルで使うよ、つまり全力で。

オーバーブーストは？

よろしく

了解！

「さあ〜と、本気でいきますか！」

「おい、ほどほどにしとけよ。オルコットをボコボコにするつもりか？」

千冬さんはため息混じりで言ってきた。隣の山田先生も苦笑いしている。

「え、祐希ってそんなに強いのか？」

「おいおい、一夏。祐希は山田先生に勝ったって言っていただろう。」

「そーいえばそうだったな．．．って、あ」

「．．．そーですね、グスン．．．。私は負けましたよ．．．」

山田先生は泣きながら言っていた。一夏くと箒ちゃんはしまったと言う顔で申し訳なさそうに謝っていた。

「す、すみません！！」

「山田君、今日の夜でも呑みに行こうじゃないか、な？」

「は、はい．．．グスン。ありがとうございます」

ちょうどいいタイミングで千冬さんに助け舟を出してもらった。って公共の場で言っているのかなあ．．．呑むって．．．。

「おい、久遠。山田君に勝っておきながら負けることはないだろうな？」

「は、はい」

「ならばいい。．．．負けたら特別メニューを組んでやる。どうだ、嬉しいだろう」

「はっ、全力を尽くして頑張ります！」

特別メニューって、やったら最後、1週間全身筋肉痛のあれですか！？やばいってそれは。．．．ああ、一夏くと箒ちゃんが哀れみの目で見てるよ。．．．。

「よし、久遠。展開しろ」

「はい、．．．白董！」

その瞬間、白と黄色の天使が形成された。アタシはすぐさまシステムチエックをする。

スキンリアー 皮膜装甲展開．．．完了。ハイパーセンサー起動。S Lドライ
スラスター ヴ正常稼働を確認。推進器稼働開始。シールドビット展開システム
正常。．．．．．システムオールグリーン、白董全システム稼働！

それに応えるように装甲の黄色のラインが光った。その光景に一夏くと箒ちゃんは感嘆の声をあげた。

「．．．綺麗だな、箒」

「ああ、まるで天使のようだ」

「・・・久遠、準備はいいか？」

「はい、・・・じゃ、行ってくるね」

「ああ、頼むぜ祐希」

「頑張れ、帰ってきたらお茶にしよう」

「ん、了解」

そう言ってアタシはピット内のカタパルトに足を運び・・・接続した。

『カタパルトの正常動作を確認。進路クリアー。カタパルト射出権を白董に譲渡します！』

アナウンスが聞こえてきた。多分山田先生だろう。

「了解！久遠祐希、白董、行きます！」

その瞬間、軽いGがかかり白董はアリーナへ飛び出した。既にそこには待機中のブルー・ティアーズがいた。

「あら、ずいぶん遅かったですのね」

手を腰に当てて言っていた。．．．イギリスではその立ち振る舞いが流行っているのかなあ？

「まあね、整備はちゃんとして置いとかないとね」

「そうですか、では最後のチャンスをあげますわ」

「ふうん、それでどんなチャンスなの？」

「代表候補生であるわたくしが勝つのは当然のこと。今謝るといふのなら、許してあげないこともなくってよ？そもそもこのブルー・ティアーズに勝つことすら出来ないでしょうけど！」

カチン。あつたまきた。コイツはまだ反省しないみいだね．．．！

ユウキ。

なに。

．．．ボコボコにしようか？

．．．スミレ？

．．．絶対え、ぶっ潰してやる！

さすが相棒！気が合っじゃん。．．．ぶっ潰すよ！

「・・・黙れ、アンタの攻撃なんて当たらないよ」

「・・・！？そう・・・残念ですわ。それなら」

ユウキ！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填したよ。

了解、いつでも回避できるようにしといて。

オツケイ、任せて！

「お別れですわね！」

キュイン！レーザーを撃ってきた・・・が。

「余裕」

普通に避ける。教科書通りの射撃だねえ。なら牽制はまずないかな。これは少し機体をずらすだけで避けれる！様子見と行きますか。

それから避ける避ける。実際あまり動かさずにして、セシリアを翻弄、そして疲れさせるのであった。

三人称 s i d e

「そろそろ始まるみたいだな、一夏」

「ああ、どんな試合をしてくれるのか楽しみだな」

ピットで試合が始まるのが待ち遠しいのか、箒と一夏は話していた。ちなみにオープン・チャネルで祐希とセシリアは会話しているのでこっちにも聞こえる。そしてあの発言があつた……

『……そもそもこのブルー・ティアーズに勝つことすら出来ないでしょうけど！』

「やばいっ！言っちゃダメだ！」

「何？どうしたというのだ、一夏！」

どういうことが分からない箒は一夏に聞いていた。もちろん千冬と真耶も興味があつたみたいで。

「あれはすぐに謝らないと……黙れ、アンタの攻撃なんて当たらないよ……やっちゃまった」

「一夏、久遠と同じ中学だったのだろう？……分かるように話せ」

「あ、ああ。分かった千冬姉。」

一夏は祐希と小学校から同じ学校、クラスだったので祐希のことはよく知っている。箒、千冬、真耶の3人は一夏の話聞くことにした。

「アイツは……祐希はキレたら誰にも止めることはできない」

「・・・なに？」

「どづいうことなんだ、一夏！」

「それって、・・・織斑君、先日のようなことですか!？」

先日のことというのはセシリアとの決闘が決まった日に起こったことだ。

「いや、山田先生。あれはまだキレたうちには入りません・・・」

「・・・まだあれは序章に過ぎないと言ったことか？」

「ああ、そつだよ千冬姉」

「待ってくれ一夏!それならっ・・・、それなら祐希はあれ以上に・・・」

「ああ、もう誰にも止めることは出来ない。相手が全身全霊で謝るまでは・・・な。あれは中学校のときだ・・・」

時は中学時代まで戻る。

中学時代、祐希は一夏、一夏の親友の五反田ごたんだ 弾だん、そして小学校高学年の時に引越してきた風ファン 鈴音達リンインとよく集まっていた。

・・・ある日昼休みの出来事だった。

ある男子生徒たちが鈴を馬鹿にし、泣かせたことがきっかけだった。

その行為に祐希はキレた。

鈴が泣いた瞬間、祐希はそばにあった椅子を男子生徒たちの目の前に．．．投げた。その瞬間、男子生徒たちは顔を投げた方にゆっくりと向けた。

．．．そこには 鬼神がいた。

「．．．鈴ちゃんを、泣かせやがったな．．．！．．．あ！？」

「．．．ッ！なんだよおまえ！やる気か？」

男子生徒1人がそう言った瞬間、惨劇が始まった。

さらに祐希は椅子だけでなく、机も投げ始めた。．．．片手で。しかも男子生徒に当てないように絶妙なコントロールで。

その後の教室は．．．惨状以外の何ものでもなかった。もはや祐希は普通ならありえないオーラを出していた。．．．いや、下手したら殺されるくらい殺気を纏っていた。それは一夏や、鈴、弾も知らなかったみたいで驚愕の顔だった。そのせいか教室は半壊。ちなみに怪我人はいなかった。ナイスコントロールだった。祐希を怒らせた生徒は本当に鬼神を見たようで怯えていた。止めようとした先生も怯えていた。必死に祐希の怒りを鎮めようと何回も土下座していた。

．．．その日は鬼神の降臨した日として中学校の歴史に残ったのである。

そして一夏、弾、鈴の3人は誓った。

ソ上位者・・・いや世界で数名しかいない。

「ちなみに久遠はどここの国の代表者でもない。以前聞いてみたが、束縛されたくないから」らしい」

「・・・なんか、むちゃくちゃ祐希らしい」

「・・・ああ、自由に居たいみたいだからな」

「オルコットさん大丈夫でしょうか・・・？」

いつの間にかセシリアへの不安に変わっていたピットの4人だった。

祐希 side

始まって5分。いまだ1発もアタシには当たっていなかった。

「・・・っつ！なんで・・・なんで当たらないのです！」

「さあ、なんでだろうね」

セシリアは息が上がって、ときれときれに声をだしていた。

対してアタシはまだ余裕だった。少ししか避けていないので疲れることはない。

「では、これならどうです．．．!」

その瞬間青いビットが飛んできた。そして4方向に分かれレーザーを撃ってきた。

スマレ!

うん!．．．シールドビット展開!

8枚のビットがウイングスラスタから外れ、二枚ずつ繋がり、表面にビームシールドを形成してビームを受ける。

「．．．ビット兵器!?これでも当たらない!?」

「ん〜、ねえ?『本気』出していい?」

「なっ．．．今まで手加減していたとでも言っただけですか!?!」

「正解〜、じゃあ覚悟しろよ．．．!日本を馬鹿にしたことを後悔しろ」

まずハンドピストル展開!そのあとショートソード展開ね!

了解、ビームの威力は?

もちろん最大で

オツケー

両手にハンドピストルが展開された。そして左右下方に展開されているビットに黄色のSL粒子ビームを1発ずつ・・・計2発を当てる。1秒後、ビット2機が爆散した。

「なっ・・・ビーム兵器ですって！？まだ机上の空論ですのに！」

そんな声も聞かずにアタシは両手のハンドピストルをそれぞれ反対側のリアスカートに収納。そのままショートソードを両手に展開し、腕をクロスした状態で左右上方にあるビットにバックハンドスローの要領で投げつけた。ちなみにこのときアタシの顔はセシリアの方・・・つまり正面を向いている。見なくてもハイパーセンサーがあるからできる芸当だ。2秒後、さらにビット2機爆散。

「全部破壊されたと言っのですの!？」

「・・・決める!！」

アタシはウインググスタスターからロングソードを取り、二刀流でセシリアに斬りかかった。・・・がセシリアは小悪魔のような笑顔で笑っていた。

「　　かかりましたわ。おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あつてよ!！」

セシリアの腰部のビットからミサイルが発射された。だけどアタシはそれを知っている。

「・・・どうかな？」

スミレ！

いつでも出来るよ！

シールドビット、ショルダー・シールドモード！

了解！続いてオーバーブースト発動！

両肩にシールドが装着された状態でオーバーブーストが発動された。アタシはミサイルに突っ込み・・・直前でバレルロールして避け、セシリアとすれ違いざまにソードを振り抜き、すぐさま離れた。

「なっ・・・バレルロール！？しかも直前に!？」

ダメージを受けながらもアタシを探しながら叫んでいた。バレルロールは普通の1年ができる技じゃない。そしてアタシはセシリアの後ろ、10メートルほど高いところにいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アタシは何も答えずロングソードをウイングスラスタに収納。そしてリアスカートからハンドピストルを取り出して撃った。

バシュツ、バシュツ、バシュツ

計3発、レーザーライフルに腰部のビット2機、それぞれに1発ずつ当てて破壊した。これでセシリアの武装は近接用のインターセプ

ター以外無くなった。．．いや、もう攻撃してくる気配はない。

「．．．．ま、参りましたわ」

その瞬間試合は終わった。

『試合終了、勝者．．久遠祐希』

セシリア side

試合終了のアナウンスの後、久遠さんがプライベート・チャンネルで話してきた。

『セシリアさん』

『は、はい』

『あなたは代表候補生としてあつてはならないことを言ったんだよ？』

『．．．．．』

『日本国に対しての侮辱．．これは最悪イギリスと日本の外交問題に発展することを知ってる？』

『!?.』

そうですね. . .、代表に近い者としてこの態度はいけなかったと思いますわね。まさに後悔ですわね. . .。

『しかし. . .あなたがどれほど頑張ってきたかも分かります』

『え.』

『代表候補生になるために誰よりも努力し、苦勞してきたのも. . .

』

久遠さんの立ち振る舞いはさつきとは違った。実際久遠さんは上において、機体の周りに金色の光を纏っていて、金色の翼が生えていた。それはまさに『天使』だった。下のものを見るような目では無かった。

『だから、アタシたちと一緒に上へ行こう? そんなに見下さなくていいよ。みんな分かってくれるから。きっと. . .』

この人は.わたくしを理解し、答えてくれた。そして一緒に高みを目指そうと. . .

ああ、この人なら. . .。あなたたちとなら、きっと分かってくれる. . .

目から大粒の涙が溢れてきた。しかしそれは悔しさの涙ではない。嬉しさの涙。

『グスン・・・あ、ありがとう・・・』

その天使はわたくしの手をとって、抱きしめた。

その日の夕暮れはとても鮮やかな赤に染まっていた。

十七話 天使の実力（後書き）

ああ、疲れた・・・。

やっと1巻の半分・・・。

次は鈴か、出してしまったが。

それでは、感想よろしくお願いします。

十八話 その後？相談？設計？なんで俺？（前書き）

タイトルがなんかヤバイです、はい。

取り敢えず忘れかけてた簪の機体を設計開始します。

ー夏ドンマイ。

それではどうぞ！

十八話 その後？相談？設計？なんで俺？

祐希 side

試合が終わってアタシはピットに戻ってきた。

「ふう〜、やっと終わった終わった」

「「お疲れ、祐希」」

「ふん、やるじゃないか久遠」

「さすがですね、久遠さん」

「ありがとうございます！」

みんな口々に褒めてくれたものだから、アタシはISを解除しながらみんなに向かって軽く敬礼をした。ここ軍じゃないけど。

「それにしても祐希、お前がSランクで自由国籍権持ってるなんて初耳だったぞ？」

「え、それどこで知ったの篝ちゃん？．．．まさか」

アタシはあの人が言ったんじゃないかと疑った。．．．もちろんそれは裏切らなかつた。

「すまない久遠、私が言った」

「織斑先生ええええ！？」

「まあどうせ後々知られるんだ。別にいいだろう？」

くっ、この人は……。

「なあ、祐希？」

「なあに一夏くん？」

「頼むっ、俺にISの特訓をしてくれないかっ？」

別に生徒会もあまりあるわけではないし……あ、そうだ！

「別にいいけど？『ホントか！？』その代わり『……え？』」

「ちょっつと会って欲しい人が居るんだよね。その人と会ってくれるならいいよ」

「なんだ、そんなことか。別にいいぜ、構わない」

「オツケイ、交渉成立ね」

よしっ、計画は順調

「なあ祐希、私も混ぜて欲しいのだが……」

「もっちらん、全然オツケイ」

「そうか、助かる。ありがとな祐希」

「いえいえ、どういたしまして。．．．それとセシリアのことだけれどね、彼女深く反省してるみたいだから許してあげよう？」

「ああ、俺は別にいいぜ」

「私は何も関わってないのだが．．．『普通に友達として接すればいいんだよ？』．．．そうだな、分かった。善処する」

よし、こつちも順調つと。仲悪いのは嫌いだからね。

「よし、話がだいたい終わったみたいだな。お前ら、さっさと今日は帰って休め。いいな？」

うわ、いきなりその発言はないでしょ．．．。もう少し優しく言えないんですか？．．．いや、言えないだろうと思った。

「そうですね、特に久遠さん？ちゃんと体を休めて明日からの授業に支障がないようにしてくださいね？いいですか？」

「「はい、分かりました」「」

「うむ、それならいい。ではな」

そういつて2日間に渡る決闘は幕を閉じたのであった。

「．．．で、祐希？俺に会わせたい人物って誰だよ」

「ん、もーちよい待ってて。もうすぐ来るから」

あれからアタシと一夏くんはアタシの部屋に行くことになり、現在アタシの部屋にいる。ちなみに箆ちゃんは『私は剣道の鍛錬をするから構わなくていいぞ』のことだ。毎日鍛錬を欠かさないとこころは見習うべきだなあ、と思う。

コンコン。

どうやら来たみたいだ。

「はぁーい」

ガチャ、ドアを開けると呼んだ人物がそこに居た。

「早かったね箆ちゃん！」

「う、うん。．．．特に何もなかったから．．．」

「じゃ、入って入って！一夏くんはもういるよ？」

「．．．．．お邪魔します」

箆ちゃんを一夏くんの真正面の椅子に座らせ、アタシもベットに腰掛けた。

「よろしく．．．つてごめん名前分からねえや」

「あゝ、そうだったね。じゃ改めて、この娘は4組の更識 箆ちゃ

ん

「更識さんか．．．よし、覚えた。俺は織斑一夏だ、よろしくな」

「．．．．．（プイッ）」

「．．．．．なあ祐希、俺なんか嫌われてるのか？」

「うん」

「即答っ!？」

「だって原因は一夏くんにあるのだもの」

「．．．俺に？」

それからアタシは事情を話してやった。白式の開発で簪ちゃんのI Sの製造が止まったこと。それで簪ちゃんに迷惑がかかっていたことなど、全てを包み隠さず話した。

「そうか．．．」

全て話し終えたあと、一夏くんは申し訳なさそうな顔つきだった。簪ちゃんも俯いたままだった。

次の瞬間、一夏くんは頭の上で両手を合せて深々と頭を下げている。

「悪いっ、俺のせいだ。ごめんな更識さん？」

「えっ……………」

その行為に簪ちゃんは驚いたようで顔を上げ、一夏くんを見ていた。

「俺は周りに迷惑がかかっていることも知らずに乗っていたんだな
・ 本当にすまない、誤って済むことじゃないが」

そのとおりである、とアタシは思った。少なからず簪ちゃんはこの
ことで精神的ダメージを負っている。許してくれるかは簪ちゃん次
第だけど…………

「…………許さない。…………けど、…………あなたはちゃんと
謝ってくれる優しい人だと分かった。でも許さない。私は相当苦し
んだから…………でも…………それでもというなら…………もつと強く
なって。そして私のISが完成したら戦って。その子を…………白式
を大切なものだと思うのなら…………」

「…………ああ、約束する。絶対に強くなって、更識さんと戦う。約
束だ！」

「良かったね一夏くん。話せてよかった？」

「ああ、真実を知れて良かったと思うぞ。しかもこんなにISを大
切にしている更識さんと話せてよかった」

「そう…………じゃあ一夏くん悪いけど席外してくれる？今から機密
情報について簪ちゃんとお話するから」

さすがにIS学園の生徒でも詳細なスペックデータを話すわけには
いかない。

「・・・打鉄式式のことか？」

「そゆこと」

「分かった、じゃあな。それと更識さん、何かあれば呼んでくれ。いつでも手伝うからな」

「・・・うん。・・・ありがとう。・・・」

最後の方はよく聞こえなかったけど、一夏くんは言いたいことを分かったみたいで部屋から出ていった。

「さてさて、簪ちゃん。話は変わるけど・・・」

「・・・設計を始めるの？」

「うん、まあ少し案は練ってたんだけどね。ほら、決闘とかあつてさ。忙しくて」

「そう。・・・で、どんな機体にするの？」

「うーんと、取り敢えず今日は時間無いから動力機関についてね」

「・・・何か変わるの？」

「うん、アタシや白式と同じSLDドライブを搭載することにしみました」

それと同時に小型端末からホログラフィックを出した。

「SL・・・ドライブ?」

「まあ、簡単に言つとね?エネルギー作り放題なんだよね」

「・・・!?!?・・・それって」

「まあまあ、でもこれはまだ未完成だから。束さんが完成させたら別だけどね」

実質SLドライブは完成していない。まず製造がたやすくはできないのが大きな問題だ。ちなみにアタシと束さんしか作れない。

「それでも現存するISは凌駕すると思つよ?」

「もう、十分と思つんだけど・・・」

「取り敢えず今日はここまでにしよつか。ほら、ちよつと夕飯時だしね」

時刻はもう6時半を回っていた。

「そう、ね。・・・よ、良かったら、一緒に・・・その・・・」

「ん?いいよ。じゃ、ちよつと待っててね。あ、一夏くんたちも呼ぶ?いいかな?」

「い、いいよ。」

「分かった」

うん、やっぱりみんなで食べたほうが美味しいしね。

「う、うん。ありがとう、祐希」

アタシはすぐさま小型端末を片付け、簪ちゃんと夕飯を食べに食堂へ向かった。

一夏side

一夜明けて。今日は普通の1日を過ごせると思ったのだが・・・甘かった。ガムシロップ並みに甘かった。五反田定食のかぼちゃ煮定食並みに甘かった。いや、そんなことどうでもいいんだけど。

なんで・・・

「それではクラス代表は織斑一夏くんに決定しました！あ、何か1繋がりでもいいですねっ！」

俺なんだよ・・・しかも山田先生最後のもいいでしょう・・・。。。。ってか、おい！！

「先生っ！！」

「はい、織斑君」

「なんで俺が代表なんですか!？」

「それは」

「わたくしが辞退したからですわ!」

「それに織斑、お前はオルコットに勝つただろう?当然だ」

「いや、まで!アイツは、祐希だって勝つたじゃねえか!?!なあ?祐希……ってあれ?」

「アイツは今整備室だ。昨日の試合で不具合が見つかったらしい。それと織斑、お前にこれを渡すようにだと、ほら受け取れ」

俺は1枚の封筒を受け取った。その中に白い紙が1枚入っていた。内容は……と。

『いや、ね?アタシも本業の開発に手を入れなきゃならなくなったからね?辞退しました。まあ、本当は面倒だったからだけど。ちなみにこの手紙を織斑先生に渡す際に正式に辞退することとおいたから。ま、ガンバ』

「あ、アイツはああああ!?!なんて事してくれるんだこのやるおおお……!」

バシインツ！！俺の頭に出席簿がクリーンヒットした。

「黙れ、席に付け。全く・・・」

「えーと、・・・それでは織斑君が代表ということで。いいですか
みなさん？」

「「「はぁーい」「」」

俺を除くクラス全員が一丸となって返事をした。俺の人権がああ・・・

十八話 その後？相談？設計？なんで俺？（後書き）

ちなみに只今31時間39分連続で起きてます・・・。

しんどっ・・・。

次回は本編から少し離れるかも？

オリ主が3人から4人に？増えるかもしれない。

こんな感じで全く作者の自分にも予測不可能（笑）

ではでは。あ、感想入れてくれると嬉しいです、はい。

十九話 名もなき場所で・・・。(前書き)

今回は東さんと前回出てきたシン、そして新たな人物が登場します

・・・そろそろ設定書かなければならないかな

あと、sideは使わないときもあるのでご注意ください。

ではじつぞー！

十九話 名もなき場所で……

IS学園でちょうど祐希とセシリアが決闘をした日のことだ。

ここは篠ノ之束の研究所。この研究所は丘の上にあり、眼下には海が見える。名もなき場所に建っている研究所は、一見誰が見ても普通の家に見える。しかしそれは地面より上の部分であり、地下に研究所があるという作りだ。ちなみにこの研究所は襲撃などを考慮して各国のあらゆるデータに記載されていない。

先日の話だが某国がこの家の情報をキャッチし、IS5機を使用し襲撃をかけてみたところ……結果は完敗だった。ステルスをかけて近づいたにもかかわらず、研究所の周りから無数のミサイルがロククし飛んできたらしい。その数は1000を超えたという。まさに鉄壁要塞とも言えるだろう。

いきなりの出来事に対応できるわけもなく、全てのISが機能を停止し撤退せざるを得なかった。その情報は各国に流れ、以降安易に攻撃するものはいなくなったのである。

その家に一人の少年がいた。蒼雲あおくも進しん。束からシンくんと呼ばれていた少年だ。束と出会ったのは去年である。それからずっとこの家で暮らしている。

彼はベランダで柵に体をあずけて目の前の海と青空を眺めていた。今日は雲ひとつない快晴だった。海の果てには水平線が見えるほど視界が良かった。

「こんなにもここは穏やかなのに．．．なぜ世界は争いを止めないのかな」

僕は東さんと会うまでは世界を旅していた．．．いや、旅するしか出来なかった。

率直に言えば親は居ない。生まれた場所も今ではもう無い。生まれたあと、育ててくれた人ももう居ない．．．いや殺されたというのが真実である。彼はその時12歳だった。

そもそも僕は普通に生まれていない。

僕が生まれたのはある軍事基地の人口子宮からだったらしい。

その軍事基地では遺伝子強化試験体の計画があった。

その中で数人だけ行われたのが『究極の遺伝子』計画だった。その計画は身体能力・頭脳などの人間のスペックを最大限まで高めた人間を誕生させる計画だった。その研究で生まれた一人が僕だった。同時に他にも2人が成功したらしい。僕ら3人は究極Ⅱ最後をとって『オメガ』という称号が付けられた。

しかし、実験が成功したとたん襲撃があった。民間の武装グループがここで生まれた子供たちを解放する作戦が行われたらしい。

その中で何人もの人が亡くなった。兵士、民間人、そしてここで生まれた子供を問わず……。

そしてその武装グループは基地を占拠した。解放された子供は指で数えられるほどだったらしい。そして全ての子供を世界各地に解放した。一箇所に集めてはまた軍に……ということらしいので各地に送り込んだ。ちなみに僕を連れてってくれたのはそのグループのリーダーであり、のちに里親となった人だった。

それから10数年が経ち、あの日が来てしまった。

某国の軍が僕の居場所を割り出し、襲ってきた。必死に僕を守ろうとしてくれた里親だった人は無残にも亡くなってしまった。亡くなるちよつと前に最後の力を絞ってその人は僕が生まれた秘密を教えしてくれた。

里親だった人が亡くなって僕は怒りの頂点に達した。

僕を狙おうとして唯一の身内を殺した軍の人を許さなかった。だがこのままでは僕自身も危ないと思い、移動手段を探した。僕は自身の身体能力を駆使して1台のトレーラーの中に入った。

そして僕の人生は変わった。

そこに居たのはISだった。

最初は男である僕は動かせないと思い、放っておこうとしたが状況が変わった。

3機のISが攻めて来たからだ。ISにはISしか対抗できないことを知っている僕は駄目元でISに触れた。

そのISは動いた。男であるにもかかわらずにだ。

「これしかない．．．！この場を生き抜くには！」

そのISはラファール・リヴァイヴだった。僕はすぐに装着した。身元を割られないようにしていたのか、頭部に外側から見られないようにバイザーがかけられた。

すぐさま調整を始めた。もともとプログラムには興味があり、それなりに知識があつたので調整は容易かつた。ものの30秒で調整は終わった。オメガならこのくらいは容易いことらしい。取り敢えず武装一覧を出し、右手にアサルトライフルを展開し飛び出た。

敵IS3機を確認。うち1機射撃態勢。

その報告を受けた瞬間、僕は二発だけそのISに撃つた。敵の武器に命中し爆散した瞬間、ライフルを収納し近接ブレードを展開。そして斬り掛かりダメージを与えたところでブレードを収納、ふたたびライフルを呼び出し連射。シールドエネルギーがなくなり、活動を止める。ここまで1分。

「．．．次！」

残りの2機もすぐさま制圧、そしてその場にいた兵士を拘束しこの場を去つた。ISと共に。

(男が使えると知ったら必ず僕の素性を調べるはずだ……!早くこの場を去らないと!)

すぐさま家に戻り旅の準備をしてこの場を去った。

ちなみにこの事件から某国の軍からISを剥奪されることになった。その中で1機奪ったのはシンなのだが、男が使えないと知っているので当然その人物は『女性』として調査が進められたのだが見つかるわけもなく、その事件は迷宮入りとなった。

シンも機体で見分けられるのはまずいと思い、色々チューンアップする上で機体カラーを変えたり、認識番号を変えたりして対応した。こんなことが出来るのもオメガの能力によるものが大きい。

それから旅をされていて、何ヶ月かたった頃。僕は旅路で一人の少女と出会った。その子は僕と同じ境遇だった。そんな共通点もあり、僕らはすぐに打ち解けた。そして2人で旅を始めた。

2年間旅をし続け、地球を一周したぐらいだろうか。僕らはあることがきっかけて東さんと出会った。東さんと出会った時に彼女とは別々の道へ進んだ。

『私もまだ色々な所を見てまわりたいと思うんだ。またいつか会えるさ、シン』

それが最後の言葉だった。今は何処を旅してるのかな……。

ちなみに今、ここに東さんは居ない。朝のことだ。東さんのデータ

イが鳴り出したかと思えば、通話が終わった瞬間・・・

『シンくん！束さんは用事ができたからちょっと出かけてくるね！夕方までには帰ってくるからね、じゃね』

と言つて家を出ていった。僕は午前中に軽く家事をして、昼食を摂り、そして今の状態である。

「何があつたのかな？あまり用事があるわけでもないし・・・。それにまだ『永遠』は完成してないのに。よほど珍しいことなのかな？」

少し考えたがそれをしたところで何も始まらないから考えるのを止めた。

辺りはもう赤く染まっていた。この家から見る景色は多分この世界で指に入るくらいの絶景だろうと僕は思う。ちなみにもう夕飯の支度は出来ている。今日はクリームシチューだ。それも三人分。なぜかというところ小一時間前に束さんから電話の内容だった。

『ゴメンね、シンくん。今帰ってるんだけどもう少し掛かりそうなんだあ、でね？ちょっとお願いなんだけど・・・』

「なんですか？」

『お客さんが来るから夕食を三人分用意してくれないかなあ？後、

空いている部屋の掃除とベッドを準備してて』

「それは泊まるってことですか？」

『さっすがシンくん！話が早くて東さんは嬉しいよ！』

「それって僕が知ってる人ですか？」

『うん、それはお楽しみっ！それじゃあよろしくね』

といった内容だった。祐希かな？と思ったがすぐやめた。今ISS学園にいる彼女がくる訳がないからだ。じゃあ誰なのか・・・？電話以来ずっと考えている。

祐希と初めて出会ったのは今年の夏だった。彼女は夏休みを利用してこの家にやってきた。僕は東さんから話を聞いていたのですぐに打ち解けることができた。彼女も僕のことを東さんから聞いていたからすぐに話しかけてきてくれたこともある。

そして客室の準備を終えて、一休みしていたときに東さんたちが帰ってきた。

「ただいまあ！ほら遠慮しないで入って入って！」

この声は東さんだ。

『・・・お邪魔します』

女の子の声だった。しかも僕とさほど変わらない歳なのか・・・。

ガチャツ、と言ってリビングのドアが開いた。まず最初に束さんが入ってきた。

「ただいま！」

「おかえり。．．．でお客様は？」

「ん？あれっ、後ろに居ない。あっ、もう！早く入って入って！」

僕はお客さんの荷物を受け取るうとしてドアに向かって歩くと、一人の女の子が入ってきた。．．．え？

入ってきたのは僕より少し背の低い女の子だった、髪は綺麗な赤で背中の中ばまであった。黒のジーンズに白いシャツを着ていた。

しかし、僕はその女の子を知っていた。ここに住むまで一緒に旅をしていたから。

「えっ．．．．．ゆ、夕夜!？」

「．．．．．シ、シン!？．．．シンなのか!？」

それはあまりにも突然の出来事だった。いきなり旅をしていた彼女が来たのだから．．．．．。

十九話 名もなき場所で・・・。(後書き)

一話で終わりきれませんでした・・・。

2部にわけます。

感想をお願い致します。

それではそれでは

20話 名もなき場所・・・ part2(前書き)

前回の続きです。

夕夜との出会いを書きます。

誰かルビの振り方を・・・!

それではどうぞ!

20話 名もなき場所で・・・ part 2

「いや、ゴメンねシンくん、ゆーやちゃん？」

あれから僕は夕飯の準備、夕夜は自分の荷物を部屋で片付けたりしていた。そして夕食を3人で摂っているところだ。

「東さん・・・ちゃんと教えてください。びっくりしましたよ」

「そうですね、私もシンがここにいるのを知らずに来たんですよ？」

「えっ、知らなかったの？」

「ああ、電話している時少し眠っていたからな。・・・んぐ、相変わらず美味しいな」

「それはどーも」

僕も今日のシチューは上出来だと思った。ちなみに僕が料理が上手なのは、旅では自分でほとんど作っていたからだ。おかげでほとんどの国の料理を知っているし、作れたりする。

「そーそー、それとシンくん。ゆーやちゃんは今日から家に住むことになったから」

「・・・！？ゴホッゴホッ！」

「シン・・・そんなに驚かなくてもいいじゃないか」

「い、ごめん。．．．ん？ということは最初からここに住むつもりで来たの？」

「ああ、１年前に一緒に来ないかと言われてただろう？ちょうど昨日行きたいところ全て行ったからな。束さんに連絡をいれた次第だ」

そういえば．．．あれからもう１年か。

「でも束さん。僕はIS学園に通うことになるんでしょう？夕夜はどうするんですか？」

そうだ、『永遠』が完成したらIS学園に行くことになっている。

「んぐんぐ、んぐとね。もちろん一緒に行ってもらうよ？ちなみに『紅』と同時にゆーやちゃんの専用機を開発中だからね」

うん、多分そう思うだろうと思ってました。

「だって、良かったね夕夜」

「ああ、またお前と暮らせるからな」

他愛もない談話をしながら夕食を食べた僕たちだった。

それから夕食を済ませた僕たちはそれぞれ行動に移った。僕は後片付け、夕夜は自室に戻って整理の続き。束さんは張り切って研究所

へ向かっていった。それから夕夜、僕の順でお風呂に入って一段落した。

二人がけのソファに座って話し始めた。

「本当に久しぶりな、シン」

「うん、そうだね。あれから1年かな・・・」

「ああ、あのあと私は色んなところに行ってみたんだ。とても充実していた日々だったけど・・・」

「けど？」

「少し寂しかった・・・な」

夕夜は体を斜めにし僕にその身をあずけてきた。特に何も問題はなし、慣れているので気にはしなかった。けれど、夕夜が寂しかったのはよく分かった。

「ん、ありがと。そういえば夕夜と初めて出会ったのは・・・」

「ああ、あの基地だな。それに私に名前をくれたのもあそこだ。今はもうないが・・・」

僕が12歳の時だった。ヨーロッパのある国の基地で僕は夕夜と出会った。

僕がその基地に行ったのは一つの理由があった。

その基地で遺伝子強化試験体の計画が進められていると言う情報を知ったからだ。遺伝子強化試験体．．．僕と同じ境遇の人がいるのかと思った。ちょうどその基地の制圧作戦が実行されると知ったので参加させてもらうことにした。僕の里親の名前を言ったところ、快く受け入れてくれた。なんでもこの作戦はあれ以来継承されてきていて、僕の里親は英雄として記憶に残っているらしい。僕はその基地の情報をハッキングで調べていたところ．．．驚くべき情報があった。そこには写真と詳細があった。

認識番号 002257．．．『究極の遺伝子』計画成功体。

「．．．！？まさか！逃げられなかったのか！？」

僕が生まれた施設の解放作戦では兵士の一部が連れ去った子供もいたと言っていた。まさか．．．

その日の夕方、強襲が始まった。基地の中心部を叩き、その間に解放するという作戦だった。幸いにもほとんどの子供が動けたのでスムーズに逃げていた。

しかし、少し離れたところで窮地に追い込まれている少女がいた。それもまた非常に危険でIS3機に囲まれていた。

（あの子は！？まずいっ！あのままじゃ危ない！）

周りに人がいないのを確認してISを展開、グレネードランチャー

を展開して少女から最も離れているIS目掛けて撃った。

夕夜side

私は解放作戦に乗じてさらに混乱を招こうとした。前々から軍には反感を覚えていた。幼年期から訓練させるなんて……！だから私はより安全に逃げれるように陽動をかけようとした……のがまずかった。

(ちっ……ここにきて囲まれるとは)

IS3機に囲まれた私は為す術がなかった。むろん向こうも普通に接してはくれないだろう。捕まったら最後、延々と懲罰が下るか、最悪な場合処刑されるだろう。

私の記憶が整理された頃から自分自身の身体能力には気づいていた。他とは違うことを。誰にも追いつかれることのない学習力と処理速度、身体能力を持っていた。私はいつも成績が格段に良かった。軍の大人たちは喜んでいたようだった。

だが私は気に入らなかった。のちのち知ったことだが、この基地の子供はみんな遺伝子の改造を受けていることを知った。もちろん私も受けていたことを。

私は許さなかった。その行為もだが幼いうちから兵士として訓練させる軍の大人たちを……

しかし、天は私を見放さなかった。次の瞬間目の前のISが爆発によつて吹き飛んだのだ。

「なっ！．．．一体誰が．．．」

弾が跳んできた方向をみるとそこにはバイザーがかけられた青と白のツートンでカラーリングされたラファール・リヴァイヴがいた。そのISはすぐさまに当たった1機に近接ブレードを携え斬りかかった。

「なに！？そんなにも早く武装の高速切替を．．．」

私は驚いていた。銃で撃つていたかと思うと、その手には銃はなくブレードが握られていたから。

そのリヴァイヴはブレードで1機のISを斬り刻み、すぐに沈黙させた。その間10秒。

『ま、まさかお前は！？フリーダムか！？』

「．．．．．．．．．．．．」

「フリーダム．．．」

その機体は答えなかった。素性を知られたくないのだろう。聞いたことがあった。現れるともものすごい操縦技術で圧倒し武装を解除させ、機能停止にさせる。気が付けば既に居ない．．．。まさに自由

に現れ、自由に動き、自由に消える・・・

気が付けばそのリヴァイヴは既に3機のISの武装を破壊、沈黙させていた。そしてそのリヴァイヴが近づいてこう言った。

「・・・この場を去るからつかまって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

驚くのも仕方がなかった。その声が男の声だったから・・・・・・・・

基地から数10キロほど離れたところで私は大地を踏んだ。後ろを振り返ると大きな炎が上がっていた。たぶん壊滅したのだろうと思っ

た。ISに乗っていた人物もISを解除した。そこにはやはり少年がいた。すると彼は話しかけてきた。

「大丈夫？ケガはない？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「そう、よかった・・・」

「すまないが、君は男だろうか？なぜISを動かせるんだ！？」

私は一番の疑問をぶつけてみた。

「・・・ごめん、僕にも分からないんだ」

「!?!?・・・そうなのか。・・・すまなかった、怒鳴ってしまつて」

「ううん、別にいいんだ。まだ君以外には知られていないし。それに動かせるのは僕の過去に関係があると思うから」

「過去・・・?」

それから彼の話をきいた。今、一人で旅をしているということも。驚愕だった。自分と同じ存在だということに。そして私も彼と同じ計画で生まれた一人であることにも・・・。

「・・・つまり、私の能力が高いのは」

「うん、その計画で生まれたからだと思う。現に僕もだから」

「そうなのか・・・ありがとな。君の名前は聞いていなかったな、何と言うんだ?」

「暁 進だよ。君は・・・?」

「私には・・・その、名前がないんだ。番号で呼ばれていた。だからシン、君が付けてくれないか」

「えっ・・・・・・・・・・そうだね」

シンは頭に手を当てて考えてくれている。

「・・・・・・・・くれない紅ゆっや夕夜でどうかかな?」

「紅 夕夜．．．。なんでこの名前にしたんだ？」

「紅は君の髪が綺麗な赤だったから。夕夜は今ちょうど空が夕方と夜の間だから．．．いけなかった？」

「うん、シンらしいと思う。ありがとう。私のことは夕夜と呼んでくれ、いいな？」

「うん、分かった。それでなんだけど夕夜、これからどうするの？」

「そうだ、今私は自由の身だ．．．しかし宛になるところなど無い。そうだ！」

「シン、私も連れてってくれないか？どこにも行く宛はないし、それに私も世界をこの目で見てみたいからな。1度も外に出たこともなかったしな」

「そうだね、いいよ。旅は一人より二人の方が楽しいだろうしね」

「ありがとう、シン。そしてこれからよろしくな！」

「うん、僕もよろしくね」

そうして私たちの旅は始まった．．．。

「今思うとあの旅は楽しかったし、危なかったね」

「そうだな、奇襲を掛けられたこともあったな」

傍から見ればこの会話、とても危険である。これは一例なんだが2人がオメガと言うこともあり、奇襲をかけられることも少なくはなかった。

しかしこの2人に勝てる者は居なかった。ISに対してはシンが、白兵戦に対しては訓練を受けていた夕夜が。このコンビに勝てるものは居なかった。

「これからもまたよろしくね」

「ああ、よろしくな」

再開から二日後、僕たちは東さんに呼ばれ地下の研究室に足を運んだ。目の前にはライトはあたってないがISがあるのかわかる。

「シンくんっ、お待ちせ！出来たよシンくん専用機！その機体の名は〜」

「『エターナル・ウィング』」

「永遠の翼・・・」

ライトが当てられた先には銀の装甲の翼の生えたISが居た・・・。

20話 名もなき場所・・・ part2 (後書き)

長かった・・・。

過去はこんな感じでいいかな。

次は本編に戻ります！

それと最初の方の祐希の設定、少し詳しくしておきます。

ではでは、感想よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679y/>

IS fusion

2011年12月21日00時52分発行